

< 高等学校 >

基礎・基本を定着させる 授業づくりガイドブック



平成 23 年 3 月

神奈川県立総合教育センター

はじめに

「知識基盤社会」と言われる現代において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むという理念がますます重要になっています。

平成 18 年には施行後、約 60 年が経って初めて教育基本法が改正され、知・徳・体をバランスよく育成するという、教育の新しい理念が定められました。

また、翌平成 19 年には、学校教育法が一部改正され、基礎的な知識及び技能を習得させること、思考力、判断力、表現力その他の能力を育むこと、主体的に学習に取り組む態度を養うことが規定され、学校教育においてこれらを調和的に育むことが必要である旨が法律上明示されました。

国内外の各種学力調査の結果からは、子どもたちの学力に関しては基礎・基本はおおむね身に付いていると言われています。しかしながら、神奈川県立高等学校学習状況調査の結果や教員の声からは、基礎・基本が確実に定着していると言えない状況も見受けられます。

神奈川県立総合教育センターは、平成 20 年度には高等学校の理数教育における学習意欲に関する研究、平成 21 年度には中学校・高等学校の理数教育における思考力・判断力・表現力の育成に関する研究を行ってきました。

そこで当センターでは、今年度、高等学校における基礎・基本を確実に定着させるための授業づくりについて研究を行い、その成果として「<高等学校>基礎・基本を定着させる授業づくりガイドブック」を作成しました。

当ガイドブックを基礎・基本の確実な定着に向けた授業づくりの参考としてご活用ください。

平成 23 年 3 月

神奈川県立総合教育センター

所 長 下山田伸一郎

目 次

はじめに

目次

このガイドブックの目的と構成

第1章 基礎・基本の定着の背景	- - -	1
1 各種学力調査に見る基礎・基本の定着	- - -	1
2 国際調査結果・本県学習状況調査結果に見る基礎・基本の定着	- - -	2
第2章 高等学校における基礎・基本とは	- - -	3
1 基礎・基本を捉える様々な視点	- - -	3
2 本研究における基礎・基本の捉え方	- - -	7
第3章 基礎・基本の定着を図るための方策	- - -	8
1 基礎・基本が定着しない理由と定着を図るための方策	- - -	8
2 R - P D C Aサイクルを取り入れた授業づくり	- - -	9
参考 学習指導要領等に見る基礎・基本の定着を図るための方策	- - -	9

第4章 基礎・基本の定着を図るための授業づくり	- - -	11
1 基礎・基本の定着を図るためのフローチャート	- - -	11
2 基礎・基本の定着を図るための学習指導案のひな型と作成上の留意点	- - -	18
3 基礎・基本の定着を図るための実践事例	- - -	20
事例1 国語（現代文）	- - -	21
事例2 国語（現代文）	- - -	30
事例3 数学（数学）	- - -	37
事例4 数学（数学B）	- - -	47
事例5 外国語（標準英語）	- - -	57
事例6 外国語（英語）	- - -	65
第5章 基礎・基本のより確実な定着に向けて	- - -	74
1 それぞれの実践から見てきた成果と課題	- - -	74
2 結び ～基礎・基本のより確実な定着のために～	- - -	81
引用文献・参考文献	- - -	83
作成関係者		

このガイドブックの目的と構成

このガイドブックの目的

このガイドブックは、「高等学校における基礎・基本を定着させるための指導に関する研究」の研究成果を基に、生徒に基礎・基本を定着させるための単元指導計画、学習指導方法、学習教材等を提示し、「わかる授業」の実現に資することを目的としています。



このガイドブックの構成

第1章 基礎・基本の定着の背景

各種学力調査に見る高校生の基礎・基本の定着状況について述べています。

第2章 高等学校における基礎・基本とは

高等学校における基礎・基本の具体的な内容について述べています。

第3章 基礎・基本の定着を図るための方策

第4章 基礎・基本の定着を図るための授業づくり

このガイドブックの中心となる章です。基礎・基本を定着させるための授業づくりを、具体例を示しながら分かりやすく述べています。

第5章 基礎・基本のより確実な定着に向けて



第1章 基礎・基本の定着の背景

急速な社会の変化に伴い、21世紀は新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」(knowledge-based society)の時代であると言われています。このような知識基盤社会の到来やグローバル化の中で、子どもたちは自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な「開かれた個」であることが求められています。また、自己の責任を果たし、他者と互いに励まし協力し合いながら一定の役割を果たすことが求められており、そのためには基礎的・基本的な知識・技能の習得や、それらを活用して課題を見だし解決するための思考力・判断力・表現力等が必要とされています。そして、これらの学力に関して様々な調査が実施されてきました。

1 各種学力調査に見る基礎・基本の定着

平成20年1月17日に公表された、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(以下、「H20答申」という。)では、国立教育政策研究所が小学校第5、6学年及び中学校第1学年から第3学年の生徒を対象に行った平成15年度教育課程実施状況調査結果について次のように述べています。「平成13年度実施の調査との同一問題の正答率の経年変化において、『有意に上回る』問題数が全体の約43%になるなど、基礎的・基本的な知識・技能の習得を中心に一定の成果が認められる。」(中央教育審議会 2008 p.12)

また、平成19年に小学校第6学年の児童及び中学校第3学年の生徒を対象に実施された全国学力・学習状況調査では、基礎的・基本的な知識・技能については、相当数の子どもたちがおおむね身に付いていると考えられるとしており、これを受けて「H20答申」では、「各種調査の結果からは、基礎的・基本的な知識・技能の習得については、個別には課題のある事項もあるものの、全体としては一定の成果が認められる。」(中央教育審議会 2008 p.14)としています。

2 国際調査結果・本県学習状況調査結果に見る基礎・基本の定着

「1 各種学力調査に見る基礎・基本の定着」で述べたように、各種の学力調査結果から見ると、義務教育段階の子どもたちの学力に関する基礎・基本はおおむね身に付いていると言えます。しかしながら、平成17年に出された、文部科学省「PISA調査、TIMSS調査の結果分析（中間まとめ）」（PISA調査は高等学校1年生対象、TIMSS調査は小学校4年生・中学校2年生対象）では、数学的リテラシー、算数・数学において、基礎的・基本的な計算技能、数についての感覚などに課題があるとしています。また、高等学校2年生を対象とした、平成21年度神奈川県立高等学校学習状況調査（以下、「H21学習状況調査」という。）の報告書を見ると、国語について、「『言語事項』については、漢字を読み、書く力が十分に身に付いていない」（神奈川県教育委員会 2009 p.8）、数学について、「図形の相似比と面積比との関係を理解していない」（同 p.10）、外国語について、「解答状況から基本的な語句の定着が不十分な生徒がいることが分かる」（同 p.54）など、基礎・基本が十分定着していない結果を読み取ることができます。学習全般に対する生徒のアンケート結果を見ても、「学校の授業がどの程度わかりますか」という質問に対して、「どちらかと言えばわからないことが多い」「ほとんどわからない」と答えた生徒の割合は47.2%で、約半数の生徒が授業を分からないと感じているという結果が出ています。

さらに、教員からは「覚えたはずの基礎的・基本的な事項を生徒はすぐに忘れてしまう。」「同じ内容の質問なのに表現方法を少し変えただけで、全く答えることができない。」「覚えた知識を単に再現するだけで、活用することができない。」などの声も聞かれ、基礎・基本が確実に定着しているとは言い難い生徒がいることが分かります。

このように、上記の学力調査結果から、高等学校では基礎・基本の定着については、個別には課題のある事項も多いという実状がうかがえます。

以上のことから、「高等学校における基礎・基本を定着させるための指導に関する研究」では、更なる確実な基礎・基本の定着が必要であると考え、そのための方策について研究を進めることにしました。



第2章 高等学校における基礎・基本とは

本章では、「かながわ教育ビジョン」や中央教育審議会答申、学習指導要領等における基礎・基本に関わる部分を整理します。次に本研究における基礎・基本の捉え方について説明します。なお、基礎・基本の定着を図るための方策については、次章で詳しく解説します。

1 基礎・基本を捉える様々な視点

(1) かながわ教育ビジョン

神奈川県教育の総合的な指針である「かながわ教育ビジョン」では、「第1章 教育ビジョン策定の背景」にある「3 人づくりにおいて踏まえるべき観点（1）不易と流行を踏まえた人づくり」の中に、基礎・基本に関して次のような記述があります。

不易には、健康と基礎的な体力、豊かな人間性や他人を思いやる心、^{いのち}生命を大切にし、人権を尊重する心、正義感、^{いつく}郷土を愛しむ心、学ぶ意欲や態度、そして「読み・書き・計算」等の基礎・基本*に基づき、自ら学び、考える力などがあります。

（神奈川県教育委員会 2007 p.14 下線は総合教育センター。）

そして用語解説では基礎・基本を次のように説明しています。

読み、書き、計算能力に加え、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決能力、学び方、学ぶ意欲などで構成される「確かな学力」を支えるもののこと。（神奈川県教育委員会 2007 p.62）



(2) 中央教育審議会答申、学習指導要領等

ア 三つの学力の重要な要素

平成 19 年 6 月に学校教育法が一部改正され、第 30 条第 2 項では小・中・高等学校等の教育目標が次のように規定されました。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

これを受けて「H20 答申」では、学力の重要な要素として次の三つの柱を示し、「生きる力」の育成を一層明確なものにしました。

基礎的・基本的な知識・技能の習得
知識・技能を活用して課題を解決する
ために必要な思考力・判断力・表現力等
学習意欲



これら三つの学力の重要な要素は、それぞれが独立しているものではありません。平成 21 年 11 月に出版された『高等学校学習指導要領解説 総則編』（以下、「H21 解説 総則編」という。）では、「基礎的・基本的な知識・技能，これらの知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等及び学習意欲の 3 つの重要な要素を調和的に定着・育成することを重視し，知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ること」（文部科学省 2009 p.53）としています。

イ 学習指導要領

平成 15 年には学習指導要領の一部改正が行われました。この改正において学習指導要領は、「すべての子どもたちに対して指導すべき内容を示したもの（学習指導要領の『基準性』）」（中央教育審議会 2008 p.7）として位置付けられました。

また、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」で

は、「学習指導要領に示されている教育内容は、いわゆる基礎・基本であり、特にその内容が精選されている以上、そのすべてを確実に習得させることを目指すとの考え方が基本となる」(中央教育審議会 2006 p.51)としています。学習指導要領に示されている教育内容は、高等学校では、各教科、総合的な学習の時間、特別活動となります。

さらに、「H21 解説 総則編」では、「学習指導要領は、高等学校教育について一定の水準を確保するために法令に基づいて国が定めた教育課程の基準である」(文部科学省 2009 p.10)としています。

ウ 義務教育段階における基礎的・基本的な知識・技能の類型

「H20 答申」では、「重点指導事項例」で提示する基礎的・基本的な知識・技能について次の二つの類型が挙げられています。



- ・ 社会において自立的に生きる基盤として実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能
- ・ 義務教育及びそれ以降の様々な専門分野の学習を深め、高度化していく上で共通の基盤として習得しておくことが望ましい知識・技能

(中央教育審議会 2008 p.24 ゴシックは総合教育センター。)

上記のように基礎・基本には、社会的自立の視点と学習の視点の二つがあります。この二つはどちらも非常に重要な視点ですが、本研究では、双方の関連性を踏まえながら、主に学習の視点に重きを置いた指導を考えていきます。

エ 高等学校における義務教育段階までの学習内容の扱い

今回の高等学校学習指導要領改訂では、学校や生徒の実態等に応じて義務教育段階の学習内容を確実に定着させるための指導を行うことが新たに示されています。

新高等学校学習指導要領の総則では、「第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」において、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る工夫が挙げられています。その中には、「各教科・科目の指導に当たり、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けること」とあります。また、「H21 解説 総則編」では、「高等学校教育の目標は義務教育の

成果を発展・拡充させること」(文部科学省 2009 p.62)であることから、生徒の実態に応じて義務教育段階までの学習内容について確実な定着を図ることが重要となります。

オ 高等学校段階における基礎・基本

「エ 高等学校における義務教育段階までの学習内容の扱い」でも述べたように、新高等学校学習指導要領では義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を行うことを重視しています。義務教育段階の学習内容は、教育課程上高い共通性が保証されています。本研究でも、義務教育段階までの学習内容は、高等学校の生徒全員に共通する必要最低限の基礎・基本であると捉えています。

一方、高等学校では生徒の多様な興味・関心や進路希望等への対応の必要性から、教育課程は、各高等学校が生徒の実態に応じて教育内容を様々な方法で学ばせるための弾力的な枠組みとなっています。そこで「すべての生徒に共通に学ばせる教育内容については、必要最小限の必修教科・科目を定める」(中央教育審議会 2008 p.40)としています。また、新高等学校学習指導要領総則の「第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」において、「教育課程の編成に当たっては、生徒の特性、進路等に応じた適切な各教科・科目の履修ができるようにし、このため、多様な各教科・科目を設け生徒が自由に選択履修することのできるよう配慮するものとする」としています。

こうした趣旨を踏まえ、本県においても各高等学校は、それぞれ学校や生徒の実態等に応じた教育課程を編成するとともに、各校の特色ある教育活動の実現を目指す教育課程の編成に努めています。各高等学校の実態等については、義務教育段階の学習内容の確実な定着が見られる生徒が多い学校もありますが、一方で十分な定着が見られない生徒が多い学校もあり、高等学校に入学してくる生徒の基礎・基本の定着状況には、学校によって大きな差があるといえます。

また、本県の「平成 21 年度公立高等学校等卒業者の進路の状況」によると、高等学校(全日制)の進路状況は、大学等進学者 56.9%、専修学校専門課程進学者 15.8%、専修学校一般課程等入学者 6.5%、公共職業能力開発施設等入学者 0.6%、就職者 10.0%、一時的な仕事に就いた者 1.6%、その他の者 8.5%となっています。高等学校における基礎・基本は、ますます多様化する生徒の興味・関心、能力や適性、進路希望等に対応したものとして考えていかなければ

なりません。

こうしたことから、高等学校における基礎・基本の捉え方については、義務教育段階の学習内容を基盤として、高等学校において全ての生徒に履修させる教科・科目（必履修教科・科目）の学習内容を中心に、高校卒業後の多様な進路選択の際に求められる学習内容という視点も含め、各学校の実態に合わせて考えていく必要があります。

つまり、高等学校における基礎・基本については、まず義務教育段階までの学習内容があり、その上に、高等学校の生徒全員に共通する必履修教科・科目の内容があります。さらに、大学や専門学校等の高等教育に必要な学習内容や高等学校卒業後すぐに就職する場合など職業的な自立に必要な学習内容など、進路に応じた学習内容が考えられます。各学校ではこれら三つの内容を生徒の実態等に応じてそれぞれ明確化し、適切な学習指導を行っていく必要があります。

こうしたことから、高等学校における基礎・基本については、高等学校の生徒全員に共通するものと各学校や生徒の実態等に応じたものの両面から考える必要があります。言い換えれば、学校ごとに自校の基礎・基本を明確化する必要があるということになります。

2 本研究における基礎・基本の捉え方

基礎・基本を捉える様々な視点を踏まえて、本研究では、高等学校における基礎・基本を次のように捉えます。

義務教育段階までの学習内容及び高等学校学習指導要領に示された各教科の目標と内容を基準とし、各高等学校・生徒の実態に応じて設定した学習内容。

各高等学校においては、義務教育段階までの学習内容をしっかりと把握し、生徒の適性や進路希望等を見通して、自校の生徒の実態に応じた基礎・基本を設定することが大切になります。そして、基礎・基本の定着を図るために、思考力・判断力・表現力等の育成につながる言語活動の充実を図りながら、効果的な指導計画、指導方法や教材・教具の工夫等を探っていくことが各学校には求められます。

第3章 基礎・基本の定着を図るための方策

1 基礎・基本が定着しない理由と定着を図るための方策

本研究における調査研究協力員会において、「基礎・基本が定着しない理由」について研究協議を行ったところ、調査研究協力員（以下、「協力員」という。）から主に次のような意見が出されました。

生徒の学習活動に関する理由

- ・単調で機械的な繰り返しの学習活動が多い。（漢字を30回ずつ書くなど）
- ・一度学習した内容をほかの単元やほかの教科等で再び取り上げる場面が少ない。
- ・学んだことが実生活と結び付かず、単なる知識で終わっている。
- ・覚えた知識を再現するだけで、それを活用する場面や機会がない。

教員の指導に関する理由

- ・生徒の基礎・基本の定着状況を正確に把握していない。
- ・基礎・基本の定着を図るための計画的な授業づくりがなされていない。

また、「H21 学習状況調査」の報告書においては指導上の改善点として、国語について、「言葉を生きたものとして学習するための工夫が必要である」（神奈川県教育委員会 2009 p. 9）、数学について、「生徒が興味・関心を持つような応用問題や身近な題材を基にした課題」（同 p.11）を与える、外国語について、「基礎的な語句は意識的に繰り返し使う」（同 p.54）、「学習した文法事項を生徒が実際に活用する場面を多く設ける」（同 p.55）といった指摘がなされています。

以上のことを基にして、基礎・基本の定着を図るための方策を次のように整理しました。

- ・生徒が興味・関心を持つような様々な学習活動の工夫をし、繰り返しの学習だけではなく活用する場面を設けること。
- ・基礎・基本の定着を図るために、ペアワークやグループワーク等、言語活動を効果的に取り入れ、授業形態の工夫を図ること。
- ・基礎・基本の定着の視点を取り入れた指導計画を立て、その中に基礎・基本の定着度の把握・確認及び振り返り等検証の機会を設けること。
- ・家庭学習を視野に入れた指導方法も取り入れること。

2 R - P D C Aサイクルを取り入れた授業づくり

「1 基礎・基本が定着しない理由と定着を図るための方策」において述べたように、基礎・基本が定着しない教員の指導に関する理由に、「生徒の基礎・基本の定着状況を正確に把握していない。」「基礎・基本の定着を図るための計画的な授業づくりがなされていない。」ということがあります。

そこで本研究では、「1」で整理した方策に基づき、基礎・基本の定着を図るための授業づくりのモデルとして、従来のP D C Aサイクルに、単元に先立って生徒の基礎・基本の定着の状況を把握し、教員と生徒がその状況について理解を共有するためのR (Research 調査)を加えた、R - P D C Aサイクルを取り入れた授業づくりを考えました。R - P D C Aサイクルを取り入れた授業づくりとは、R、P (Plan 計画)、D (Do 実施)、C (Check 目標の達成度の検証)、A (Action 今後に向けた改善)を1サイクルとして、単元もしくは1時間の授業を計画し、行っていく考え方です。

本研究では、R - P D C Aサイクルに、「1」で整理した方策と具体的な手立てを組み込み、一つの単元を1サイクルとして、基礎・基本の定着を意識した指導を意図的に行うことで、基礎・基本のより確実な定着を図ることをねらいとしました。

参考 学習指導要領等に見る基礎・基本の定着を図るための方策

本冊子では取り上げることができなかった、新高等学校学習指導要領や「H20 答申」に見られる基礎・基本の定着に関わりがある方策をまとめておきます。

基礎・基本の定着を目指す授業づくりの参考にしてください。

(1)教育課程編成における方策

- ア 必履修科目の標準単位数より減らした配当
- イ 1単位時間の運用
- ウ 内容の適切な選択
- エ 標準単位数より増やした配当
- オ 学校設定科目の設置

ア 必履修科目の標準単位数より減らした配当

「特に必要がある場合には、(略)その単位数の一部を減じることができる。」とあります。例えば基礎・基本の定着を目標として学校設定科目等を履修させた後に、単位数を減じた必履修教科・科目を履修させることができます。ただし、当該必履修教科・科目の教科・科目目標を達成できることが前提となります。(新高等学校学習指導要領総則第3款1(1))

イ 1単位時間の運用

「授業の1単位時間は、各学校において、(中略)適切に定めるものとする。なお、10分間程度の短い時間を単位として特定の各教科・科目の指導を行う場合において、(中略)その時間を当該各教科・科目の授業時数に含めることができる。」とあります。(同第4款7)

ウ 内容の適切な選択

「学校においては、(中略)各教科・科目の内容に関する事項について、基礎的・基本的な事項に重点を置くなどその内容を適切に選択して指導することができる。」とあります。(同第5款2(4))

エ 標準単位数より増やした配当

「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図りながら、必履修教科・科目の内容を十分に習得させることができるよう、その単位数を標準単位数の標準の限度を超えて増加して配当すること。」とあります。(同第5款3(3)イ)

オ 学校設定科目の設置

「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目等を履修させた後に、必履修教科・科目を履修させるようにすること。」とあります。「ア 必履修科目の標準単位数より減らした配当」を参照してください。(同第5款3(3)ウ)

(2)授業形態・指導方法による方策

- ア 習熟度別指導
- イ 少人数指導
- ウ 家庭学習を視野に入れた指導

「H20答申」に「確かな学力を育成するためには、従来の一斉指導の方法を重視することに加えて、習熟度別指導や少人数指導、発展的な学習や補的な学習などの個に応じた指導を積極的かつ適切に実施する必要がある。これらの指導形態における指導方法の確立が望まれる。また、家庭での学習課題(宿題や予習・復習)を適切に課すなど家庭学習を視野に入れた指導方法も重視する必要がある。」(中央教育審議会 2008 p.141)とあります。

第4章 基礎・基本の定着を図るための授業づくり

1 基礎・基本の定着を図るためのフローチャート

第3章の「2 R - P D C Aサイクルを取り入れた授業づくり」で述べたように、基礎・基本が定着しない教員の指導に関する理由に、「生徒の基礎・基本の定着状況を正確に把握していない。」「基礎・基本の定着を図るための計画的な授業づくりがなされていない。」ということがあります。

そこで本研究では、基礎・基本の定着を図るための授業づくりに向けて、「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」(以下、「フローチャート」という。)を作成しました。これは、従来のP D C Aサイクルに、既習の基礎・基本の定着度を単元に先立って、もしくは単元の初めに調査するためのR (Research)を加えたR - P D C Aサイクルを基盤としたものです。

このフローチャートは、次の二つの視点に基づいて作成されています。

- 1 R - P D C Aサイクルに基づいて、単元を見通した効果的な授業づくりを行う。
- 2 R - P D C Aサイクルに基づいた単元計画の中で、「学習の三つの手立て」を講じる。

本研究においては、R、D、Cの各段階で意識的に実践するものとして、「学習の三つの手立て」を設定しました。それらは次のようなものです。

- 手立て1 Rの段階で、既習の基礎・基本の定着度を把握する
- 手立て2 Dの段階で、基礎・基本の定着を図る
- 手立て3 Cの段階で、基礎・基本の定着度を検証する

それぞれの手立てについて、実践のための具体例を示すとともに、幾つかの具体例については、検証授業における実践例を紹介します。

基礎・基本の定着を図るためのフローチャート

事前の準備

生徒に身に付けさせたい基礎・基本を各教科で学年ごとに整理する。

↓
単元計画を立てる際に単元目標（学習のねらい）を明確にする。

↓
本単元に必要な基礎・基本を整理する。

- (1) 義務教育段階における既習事項
- (2) 本単元に至るまでの、高校入学後の既習事項

自校の生徒に身に付けさせたい基礎・基本を、卒業までの流れを見通して整理します。

R 既習の基礎・基本の定着度の把握

「事前の準備」で整理した、本単元に必要な基礎・基本を把握します。

把握した結果は生徒にフィードバックし、教員と生徒の双方が基礎・基本の定着状況に関して共通理解を図るようにします。

教員は結果を単元案・授業案の作成にいかし、生徒は定着が不十分なところを意識して授業に臨みます。

手立て1【R】

既習の基礎・基本の定着度を把握する手立て
(詳しくは p.14 参照)

P 単元指導計画の作成

Rの結果を基に、基礎・基本の定着を図る視点を入れて、単元指導計画を作成します。

(詳しくは p.18 以降の単元指導計画参照)

A 今後の学習に向けての改善

定着度の検証を通して明らかになった成果と課題を踏まえ、今後の学習に向けて適切な改善策を講じます。

(詳しくは p.27 , p.35 , p.45 , p.55 , p.63 , p.72)
(各事例の「成果と課題、今後の改善点」参照)

C 基礎・基本の定着度の検証

基礎・基本の定着度を、発問による生徒とのやり取りや確認テスト、振り返りシート、事後アンケートなどを通して検証します。

定着状況が思わしくなければ、学習プリントを与えるなど、適切な指導を行います。

手立て3【C】

基礎・基本の定着度を
検証する手立て
(詳しくは p.17 参照)

D 授業の展開

基礎・基本の定着をより意識して、授業形態を工夫したり、様々な手立てを講じたりしながら、学習指導を行います。基礎・基本の定着度を、単元の学習の中で丁寧に確認しながら授業を進めることが大切です。

手立て2【D】

基礎・基本の定着を
図る手立て
(詳しくは p.15 参照)

手立て1【R】 既習の基礎・基本の定着度を把握する手立て

【R1】アンケート

記述欄を設けたアンケートを実施すれば、生徒が自分の学習の定着状況について、客観的に認識することを促すことができます。

また、単元の前後の変容を見取るために関心・意欲に関する質問項目を設けておくとよいでしょう。

事例1(国) p.23, p.25

【R2】ワークシート

生徒の実態に応じて作成します。新単元での学習内容を含めることもできます。授業中での活用を想定しています。生徒が取り組みやすい、適切な分量と内容となるよう留意します。

事例1(国) p.23

事例2(国) p.31

【R3】発問

発問による生徒とのやり取りを通して既習事項の定着状況を把握します。

事例3(数) p.39, p.40

事例4(数) p.50

【R4】小テスト

生徒の実態に応じて作成します。既習事項に絞った「レディネステスト」、新単元での学習内容()を含む「診断テスト」などが考えられます。あくまで、基礎・基本の定着状況を把握するためのものであり、必ずしも評価の対象とする必要はありません。

() 新単元の中でも、既習事項を活用して取り組める学習内容。

事例5(外) p.59

事例6(外) p.66

【R5】家庭学習プリント

生徒が取り組みやすい、適切な分量と内容となるよう留意します。例えば、語群から選択する形式のものならば生徒は取り組みやすいでしょう。ノート提出に備え、ノートに貼るように指導しておくこともできます。

この手立ては予習を兼ねる働きがあります。生徒の実態に応じて、新単元での学習内容を含めることもできます。

【R6】机間指導

机間指導で、ノートやワークシート等を点検し、定着状況を把握します。個別に指導を行うことで、学習効果をより高めることができます。

手立て2【D】 基礎・基本の定着を図る手立て

【D1】学習プリント、ワークシート

徐々に難易度が上がっていくように作成します。

例えば、「説明を読んで該当する語句を選ぶ」から「語句を自分の言葉で説明する」への発展等が考えられます。

また、手立て1の結果を基に、定着が不十分な点をまとめたものを配付し、単元に入る前に生徒に学習させておく方法もあります。

事例1(国)

p.23, p.24, p.26

事例2(国) p.32, p.34

事例3(数)

p.41, p.42, p.43

【D2】授業形態(ペアワーク、グループワーク等)

学習のねらいによって、適切な人数、適切なテーマ、適切な机の配置状況を設定することが肝要です。また、活動の時間(活動の終了時刻)をあらかじめ生徒に示すこと、活動が終われば机を元の状態に戻し、教員に注意を向けさせることもポイントです。

事例1(国) p.26

事例2(国) p.32, p.34

事例5(外) p.59, p.62

事例6(外) p.67, p.68

【D3】板書

ポイントを板書したらその時間は消さずに残しておき、必要に応じて参照させます。また、ポイントを画用紙等、見やすい形でまとめ、黒板に貼り付けて活用する方法もあります。

事例1(国) p.25

事例3(数) p.44

事例4(数)

p.50, p.52, p.54

【D4】机間指導

机間指導で、ノートやワークシート等を点検しながら指導することにより、基礎・基本の定着を図ります。個別に指導を行うことで、学習効果をより高めることができます。

事例3(数) p.40

事例5(外) p.59, p.60

【D5】教材・教具

プレゼンテーションソフト等を利用した、視聴覚教材を活用します。その際、視聴覚教材の活用はあくまで授業のねらいを実現するためのものであり、見ただけ、聞いただけに終わらない指導をすることが大切です。また、自作の教具を活用をすることも考えられます。

事例4(数) p.51, p.53

事例6(外) p.67, p.70

【D6】声に出させる活動

指名読み、一斉読み、復唱等の工夫をします。例えば英語では、ペアワークでパートナーが読んだ英文を見ず、間を空けないで言うシャドウイングや、少し間を取って再生するリピートイングなどが考えられます。

事例5(外) p.62

【D7】基礎・基本に意識を向けさせる活動

授業の最初に、基礎・基本を生徒に気付かせる活動を行います。例えば、テキスト本文や英字新聞から単元で学習する基礎・基本を探させ、単元を通して基礎・基本を意識させることで確実な定着につなげます。

事例5(外) p.59, p.61

事例6(外) p.67, p.70

【D8】発問

生徒の実態に応じて、ヒントの与え方を工夫したり、聞き方の難度を変えたりするなどが考えられます。学級の実態に応じて、席順に指名したり、ランダムに指名したりします。

手立て3【C】 基礎・基本の定着度を検証する手立て

【C1】要約、説明、論述、発表等

思考力・判断力・表現力等を育成するための学習活動を通して基礎・基本の定着度を検証します。

事例1(国) p.24

事例2(国) p.33, p.35

事例5(外) p.62

事例6(外) p.68

【C2】振り返りシート・アンケート

学習の振り返りをさせることにより、基礎・基本の定着について、生徒の自己理解を促します。関心・意欲に関する質問項目を設け、【R1】(p.14)と比較することで、関心・意欲の変容を検証することもできます。

事例1(国) p.24

事例3(数) p.44

事例5(外) p.62

事例6(外) p.68

【C3】家庭学習プリント・教材

単元終了後に実施します。復習を兼ねる働きがあります。発展的な学習を含めることもできます。また、次に学習する単元の基礎・基本の問題を入れて、大まかな定着の傾向をつかむことができます。

事例4(数) p.55

事例5(外) p.59, p.60

事例6(外) p.68, p.71

【C4】確認テスト(定期テスト含む)

基礎・基本は次のような見取りを通して、定着度を検証できます。

単元目標の達成度を見取ることで、目標の達成に必要な基礎・基本が定着したかどうかを検証する。

基礎・基本の定着を見取る設問を作成し、その結果を検証する。

事例5(外) p.59, p.60

事例6(外) p.68, p.71

【C5】発問

発問による生徒とのやり取りを通して基礎・基本の定着度を検証します。

事例6(外) p.67, p.70

2 基礎・基本の定着を図るための学習指導案のひな型と作成上の留意点

本研究では、基礎・基本の定着を図るための学習指導案のひな型を作成しました。このひな型では、単元における基礎・基本を明確にし、その定着を図るための視点などを取り入れています。3教科の実践事例をご覧ください。皆さんが実際に指導案を作成されるときに参考となります。

- 1 学年・科目名
- 2 単元名（使用教科書名）
- 3 単元の目標
- 4 単元について



単元計画を立てるときに、基礎・基本の定着のみが目的にならないように注意しましょう。基礎・基本の定着とともに単元目標を達成することが大切です。

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）

義務教育段階までと高等学校入学後から本単元までの既習事項で、本単元を理解するために必要となる主な基礎・基本を具体的に記述します。

本単元における基礎・基本

本単元の目標達成のために必要となる新たに学習する基礎・基本を具体的に記述します。

- (1) 単元観（義務教育段階及び高校入学後から本単元に至るまでの学習内容を踏まえて、本単元に必要な既習事項を記述します。また、単元のねらいや教材・題材等について記述します。）
- (2) 生徒観（各学校における生徒の学習に対する取組状況、知識や技能の習得等の状況について記述します。その際、神奈川県立高等学校学習状況調査の結果等を活用します。）
- (3) 指導観（単元目標の達成に必要な主な指導・支援を具体的に記述します。「生徒による授業評価」の結果等も反映させて指導・支援の具体例を記述します。）

5 単元の評価規準

評価の観点（*）	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	
思考・判断	
技能・表現	
知識・理解	

（*）評価規準は現行のものに沿っています。また、評価の観点は、各教科で異なります。

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》
R	<p>R (Research) は調査です。単元計画を考える上で、既習の基礎・基本の定着状況をしっかり把握しましょう。</p> 	<p>ここでは、単元を通した手立て1～3の概略を記述します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 最初に単元目標を達成するために必要な基礎・基本の定着度を把握する手立てを記述します。 次に既習事項の基礎・基本及び本単元の基礎・基本を意識させ定着を図るという視点で、教員側から見た具体的な指導・支援・留意点等を記述します。 最後に基礎・基本の定着度を単元目標の達成と絡めて検証する手立てを記述します。 	
1			
2			
⋮			

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	

【思考・判断】、【技能・表現】、【知識・理解】も同様です。

8 本時の展開

(1) 本時の目標

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》	
導入					
展開				<p>ここでは、手立て1～3の中から、本時における手立てを具体的に記述します。</p>	
⋮					

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）	成果 課題	<p>単元を通した生徒の基礎・基本の定着状況や、教員自身の振り返りを通して、成果・課題をまとめ、今後の授業改善にいかします。</p>
本単元における基礎・基本	成果 課題	
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		

3 基礎・基本の定着を図るための実践事例

このガイドブックでは、実践事例を6例掲載しています。各事例の概要は次のとおりです。

事例番号 (教科)	科目(学年)	単元名	本単元において定着を図る 基礎・基本の概要	掲載 ページ
事例1 (国語)	現代文 (3学年)	評論 「支配の役割」	・文章の中心的な部分と付加的な部分、 事実と意見などを読み分け、目的や必要 に応じて要約したり要旨を捉えたり すること。	p.21
事例2 (国語)	現代文 (3学年)	小説 「おぼろ月」	・文章中の表現から時代設定や登場人物 の設定を的確に読み取ること。 ・慣用的な表現の意味を理解すること。	p.30
事例3 (数学)	数学 (1学年)	二次関数の グラフ	・二次関数のグラフの形状や増加減少、 二次関数における定義域と値域の関 係を理解し、活用すること。	p.37
事例4 (数学)	数学B (2学年)	ベクトルと 平面図形	・位置ベクトルや直線、円のベクトル方 程式を理解し、ベクトルの図形への応 用を図ること。	p.47
事例5 (外国語)	標準英語 (卒業年次)	分詞	・分詞(現在分詞、過去分詞、分詞構文) の働きと意味を理解し、それを活用し て様々な英文を正確に読むことができ ること。	p.57
事例6 (外国語)	英語 (2学年)	Lesson5 「Mars - The Only Way Out?」	・未来進行形、未来完了形、不定詞の副 詞的用法の働き及び意味を理解する こと。 ・学習内容を活用して、コミュニケーション 活動を通して、自分の考えを表現 できること。	p.65

各事例の「基礎・基本の定着を図るための視点」にある三つの手立てを次のように示しました。第4章の1にある例も含め、参考にして下さい。

- ・既習の基礎・基本の定着度を把握する手立て 【R 1～6】(RはResearch)
- ・基礎・基本の定着を図る手立て 【D 1～8】(DはDo)
- ・基礎・基本の定着度を検証する手立て 【C 1～5】(CはCheck)

事例1 国語（現代文）

- 1 学年・科目名 3 学年・現代文
2 単元名（使用教科書名） 評論「支配の役割」小坂井敏晶
（探求現代文 改訂版：桐原書店）

3 単元の目標

- ・文章の構成、展開、要旨などを的確に捉えられるようになる。
- ・文章の内容を批評することを通して、人間や社会について自分の考えを深めたり発展させたりする。
- ・様々な情報を分析、整理して、自分の意見を書く。

4 単元について

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）

- ・説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。
中2
 - ・文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方を捉え、内容の理解に役立てること。中3
 - ・文章を読んで、人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。中3
 - ・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。
高1
 - ・論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること。高2
- 中 は中学校既習事項、高 は高等学校既習事項、数字は学年を表す。

本単元における基礎・基本

- ・文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりすること。

(1) 単元観

説明的な文章について、中学校段階では事実や実態を分かりやすく説明した説明文を中心に学んでくる。そして高校からは仮説を中心に据えて事例によって論証していく評論での読解学習が本格的に始まっていく。

事実を説明した文章と、仮説を論証していく文章の差異を踏まえ、高校段階では仮説（筆者の見方・考え方）、検証（事実・事例・実態）、主張（意見）の違いを判別して、要旨を的確にまとめる学習活動が必要となる。

要旨を的確に把握する力を前提として、理解した内容に対する自分の考えを「書くこと」が成立する。これらの要旨をまとめる力、意見を書く力を育てるための学習活動を、国語科の授業で繰り返し経験させていきたい。

(2) 生徒観

「H21 学習状況調査」では、読むことでは、現代文の設問四（「文章の構成や表現の特徴をとらえる」）の通過率が全体的にやや低く、文章の構成や表現の特徴を捉える力に課題があるとされている。また、書くことでは、全体的な無解答率が 18 年度の 29.0%から、21 年度の 25.4%に下がっていることで指導が一定の成果を上げていると考えられているものの、教科に関するアンケート調査によると「自分の思いや考えを文章に書くこと」が苦手であるという回答が最も多く、引き続き指導を粘り強く行う必要がある。

本校の生徒は、仮説、検証、主張の違いを判別して、文章の構成や展開を捉える学習に対して戸惑う場合が多い。具体的には、筆者の考え方が述べられた段落であっても、その考え方に共鳴してしまうと、「事実である」と認識してしまう。

内容を的確に捉える力を付けるには、まず形式段落を意味段落に構成し直し、意味段落ごとに内容を読み取り、その内容が仮説、検証、主張のいずれを述べているのかという展開を段落相互の関係から捉える、という学習活動を繰り返す必要がある。

(3) 指導観

本単元では、文章の構成と展開を捉える学習活動を経て、論旨を 200 字で要約する活動へと進めていく。その上で、大学入試問題への取組みへと発展させていく。単元のまとめでは、意見文を書くことで自己の意見を形成していくことを目指す。

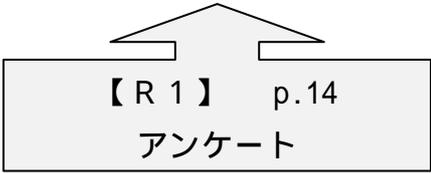
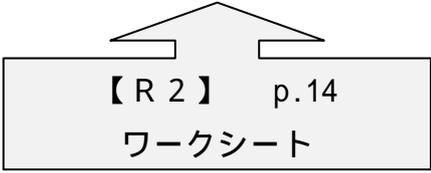
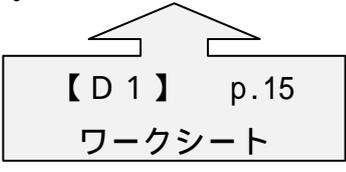
具体的な学習指導としては、基本的な文型で整理して、評論の読み方を繰り返し指導する。さらに、基本的な文型を意識して、形式段落や意味段落ごとに 20 字から 35 字で内容をまとめさせる。それらの簡潔な文の組合せによって、文章全体の要旨を 200 字で的確にまとめさせる。

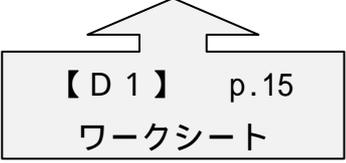
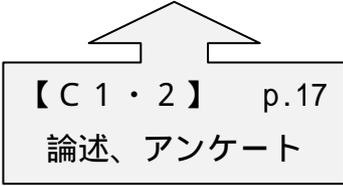
また、本単元では、グループワークを取り入れて学習効果を上げたい。

5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	文章の構成、展開、要旨などを的確に捉えようとしている。
読む能力	文章の組立てを確かめたり、段落相互の関係を読み取ったりしながら、書き手の主張や文章の内容を捉えている。 文章の要点を押さえながら、書き手が述べようとしていることを簡潔にまとめている。
知識・理解	語句について、その意味や文脈の中での使われ方を理解している。

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》
R		事前アンケートを実施する。 	事前アンケートはp.28をご覧ください。
1	<ul style="list-style-type: none"> 形式段落ごとに文章を一読する中で、段落ごとの中心となる文に線を引いたり簡潔にまとめたりし、各段落が仮説・検証・主張のいずれに該当するか識別して構成や展開を捉える。 本文の前半を学習する。 <p>詳しくは、「8 本時の展開」(p.25)で説明します。</p>	仮説、検証、主張の基本的な文型を意識して構成や展開を捉えさせる。 	（読む能力） 《ワークシートチェック》 ワークシートはp.24をご覧ください。
2	<ul style="list-style-type: none"> 本文の後半を学習する。 	仮説、検証、主張の基本的な文型を意識して構成や展開を捉えさせる。	（読む能力） 《ワークシートチェック》
3	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの記述を利用して、文章全体を200字で要約する。 <p>ワークシートは p.24 をご覧ください。</p>	各段落の内容から展開を捉えて内容をまとめさせる。	（読む能力） 《ワークシートチェック》
4	<ul style="list-style-type: none"> 関連する論題の入試問題を解く。 解答、解説を聞き、適宜質問をする。 	基本的な文型を意識して構成や展開を捉えさせる。 接続詞の働きに留意しながら読ませる。 	（読む能力） （知識・理解） 《ワークシートチェック》

5	<ul style="list-style-type: none"> ・各自で小論文入試問題を読解して、班ごとに内容を確認する。 ・課題について話し合う中で、ものの見方や考え方を深める。 ・話合いの結果を班ごとに発表する。 	<p>各段落の内容から展開を捉えて内容をまとめさせる。 様々な意見や感想を、しっかりと聞き取るためにメモを残させる。</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>(読む能力) (知識・理解) 《ワークシートチェック》</p>
6	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の論調を踏まえた上で具体的問題にどのように向き合うか、自分なりの意見文を小論文として書く。 ・本単元での学習を振り返る。 	<p>筆者の論調に賛成なのか反対なのか、各自の立場を明確にして書かせる。</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>(関心・意欲・態度) 《小論文の記述》 《振り返りアンケート》</p> <div style="border: 1px dashed black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin-top: 10px;"> <p>振り返りアンケートは p.29 をご覧ください。</p> </div>

ワークシート

		⑨～⑬段落	①～⑧段落		
課題 二百字で要約をしましょう。				仮説の段落	評論「支配の役割」 要約ワークシート 組番 氏名
				検証の段落	
				主張の段落	
第3時で使用		第2時で使用		第1時で使用	

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【読む能力】

学習活動における具体の評価規準	文章の組立てを確かめたり、段落相互の関係を読み取ったりしながら、書き手の主張や文章の内容を捉えている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的な状況例	形式段落ごとに内容を簡潔にまとめ、各段落が仮説、検証、主張のいずれであるか適切に類別している。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	形式段落ごとに内容を簡潔に示し、仮説、検証、主張の基本的な文型と照合させる。

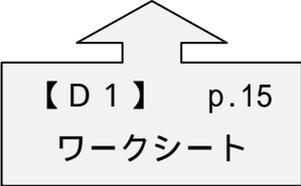
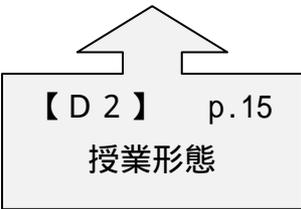
8 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・文章の組立てを確かめたり、段落相互の関係を読み取ったりしながら、書き手の主張や文章の内容を捉える。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準(観点)《評価方法》
導入 5分		<p>評論の読み方を再確認する。 指名して段落数を確認する。</p> <p>時間中は消さずにおき、授業の振り返りの時に確認させます。</p>	<p>あらかじめ事前アンケートを実施しておく。 (時間外)</p> <p>【R1】 p.14 アンケート</p>	<p>事前アンケートは p.28 をご覧ください。</p>
			<p>目標と教材を板書する。</p> <p>【D3】 p.15 板書</p>	

<p>展開 30分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本文（前半）を音読する。 ・本文（前半）の構成や展開をワークシートに記入する。 ・班を作り、ワークシートに記入した本文の構成や展開について意見交換する。 ・班としての見解をまとめる。 ・班活動での話合いの結果を発表する。 	<p>指名により、語句の読み方や意味を確認しながら読み進む。</p> <p>疑問点については話し合ったり質問したりするように指示する。</p> <p>制限時間を意識して報告させる。</p>	<p>事例や実態からどのような考え方ができるかを意識して資料を読ませる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D1】 p.15 ワークシート</p> </div> <p>話合いのための人数を3～4人とする。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D2】 p.15 授業形態</p> </div>	<p>（読む能力） 《ワークシートチェック》</p>
<p>まとめ 15分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師による解説を聞く。 ・解説への質疑を行う。 ・次回の予告を聞く。 	<p>板書して解説する。 次回は文章の後半を読解し、その後の授業で200字で要約することや意見文作成に進むことを予告する。</p>	<p>段落ごとのまとめの集積が全体の要約につながることを意識させる。</p>	



《授業風景》

班の発表を黒板上でまとめています。

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本 (既習事項)	成果	<p>これまでも、評論文を仮説、検証、主張という三つの基本的な文型で整理しながら読解する、という指導を行ってきた。今回、グループワーク(班活動)の中で自分の考えを他者に説明する、という手立てを講じたことで、生徒が授業に主体的に取り組む姿勢が見られた。また、この活動を通して、基本的な文型への理解がより深まり、基礎・基本の定着が図られた。</p>
	課題	<p>アンケートに、「グループで話し合うよりも、先生の解説時間を多くして丁寧に解説してほしい。」と書いた生徒もいたので、班活動の有用性が実感できるよう、丁寧に指導していくことが必要である。また、説明や評論などの文章を読み、表現の仕方について自分の考えを述べる、というところまではできなかったため、表現の仕方について考えさせる指導を工夫していきたい。</p>
本単元における基礎・基本	成果	<p>意味段落ごとの内容が、仮説、検証、主張のいずれに当たるかを分類するワークシートを手立てとして用いたことで、意見と事実などを読み分け、要旨を捉えて要約することができた。また、ワークシートの作成をグループワークを通じて行ったことで、より正確に文章の内容を捉えることができたことから、基礎・基本の定着に効果があったと考えられる。アンケートに、「評論の要約が苦手だったけれど、グループワークで他の人の意見を聞いてじっくり取り組むことができ、少し評論の要約に自信ができました。」という記述が見られた。</p>
	課題	<p>要約するという学習活動に苦手意識や負担感を持つ生徒も多くいるので、苦手意識や負担感を軽減する指導の工夫が更に必要である。また、グループワークを導入することで、多少時間は掛かるが、質の高い学習が可能となる。しかし、アンケートで、「チームワーク形式の授業は嫌いです。」と書いた生徒もいたため、学習の進捗の確保や学習の効果を感じ取らせる工夫が必要である。</p>
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		<p>文章の要旨を捉えて要約することはできたが、表現の仕方について考えさせるところまでは時間の制約もあってできなかった。今後、指導の工夫を考えていきたい。また、グループワークについても、発言する生徒に偏りがあったり、一部の生徒の発言に安易に左右されてしまう場面もあったため、内容や表現の仕方を吟味しながら聞く態度の育成などについて、改善の余地があると考えられる。</p>

単元の事前アンケート

これまでの評論の学習を振り返って、次のアンケートに教えてください。

このアンケートは、学習の身に付いている度合いを先生と皆さんがお互いによく知ること
とで、よりよい授業を行うための参考とするもので、評価には関係ありません。

(国語の学習に関わる知識・理解)

評論の基本的な文型を

- 1：理解している 2：ある程度理解している 3：あまり理解していない
4：全く理解していない

(評論を読む力)

評論の構成や展開を捉えることが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(評論を読む力)

評論を要約することが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(グループワークでの話す力)

自分の考えを他者に伝えることが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(グループワークでの聞く力)

他者の意見や考えを聞いて要点をつかむことが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(自分の考えを文章で書く力)

自分なりの考えや意見を書くことが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(評論学習への関心・意欲)

評論の読解に対して、主体的に取り組むことが

- 1：できる 2：ある程度できる 3：あまりできない 4：全くできない

(自由記述欄)

評論の学習に関して日頃感じていることや、本単元の学習への要望があれば書いてください。

3年 組 番 氏名 ()

単元の振り返りアンケート

(国語の学習に関わる知識・理解)

評論の基本的な文型を理解することが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(評論を読む力)

評論の構成や展開を捉えることが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(評論を読む力)

評論を要約することが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(グループワークでの話す力)

自分の考えを他者に伝えることが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(グループワークでの聞く力)

他者の意見や考えを聞いて要点をつかむことが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(自分の考えを文章で書く力)

自分なりの考えや意見を書くことが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(評論学習への関心・意欲)

評論の読解に対して、主体的に取り組むことが

1：できた 2：ある程度できた 3：あまりできなかった 4：全くできなかった

(自由記述欄)

今回の評論の学習を振り返っての感想や、今後の学習への要望があれば書いてください。

3年 組 番 氏名()

事例2 国語（現代文）

- 1 学年・科目名 3 学年・現代文
2 単元名（使用教科書名） 小説「おぼろ月」藤沢周平
（新編現代文 改訂版：大修館書店）

3 単元の目標

- ・表現を味わい、小説を読む面白さ、楽しさを実感する。
- ・作中の人物・心情・情景などを表現に即しながら的確に捉える。
- ・短編小説の構成・展開の妙や文体のテンポの良さを読み取る。

4 単元について

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）

- ・伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。
中1
 - ・慣用句・四字熟語などに関する知識を広げ、和語・漢語・外来語などの使い分けに注意し、語感を磨き語彙を豊かにすること。中3
 - ・文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。
中3
 - ・文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。中3
 - ・文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。高1
 - ・様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること。高1
 - ・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえること。高2
- 中 は中学校既習事項、高 は高等学校既習事項、数字は学年を表す。

本単元における基礎・基本

- ・文章中の表現から時代設定や登場人物の設定を的確に読み取ること。
- ・登場人物の心情を表す表現や慣用的な表現の意味を理解すること。

(1) 単元観

現代と異なる時代を背景とした時代小説であり、表現の中から情景や人間関係を的確に読み取るとともに、時代を越えて現代にも共通する若者の心情を捉え、人間の普遍的な姿について考えるのに適した教材である。

(2) 生徒観

義務教育段階までの学習事項が定着しておらず、基礎的な知識の習得が課題となってい

る。「H21 学習状況調査」の結果でも、「人物の心情を表現に即して読み味わう」の通過率は45.1%と低く、表現から心情を読み取ることが十分にできていない状況である。

(3) 指導観

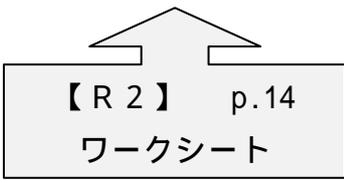
文章を読み味わう上で、基本的な語彙を知ることが単に意味内容を理解することだけにとどまらず、そこから人物の心情を読み解くことにつながることを身に付けさせる。

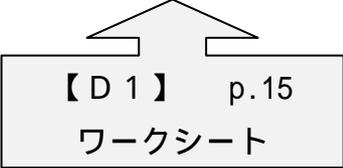
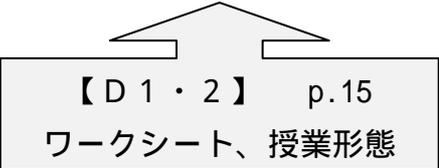
また、「生徒による授業評価」では「わからないことがあれば質問するなど、授業に積極的に参加しているか」の問いに対する「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」と回答した生徒の割合は他の項目と比較して低い。分からないときもそのままにしていることが多いことから、表現に対する理解の度合いをペアワーク、グループワークなど生徒同士による学び合いの活動を通してその都度確認し、人物の心情に対する理解を図る。

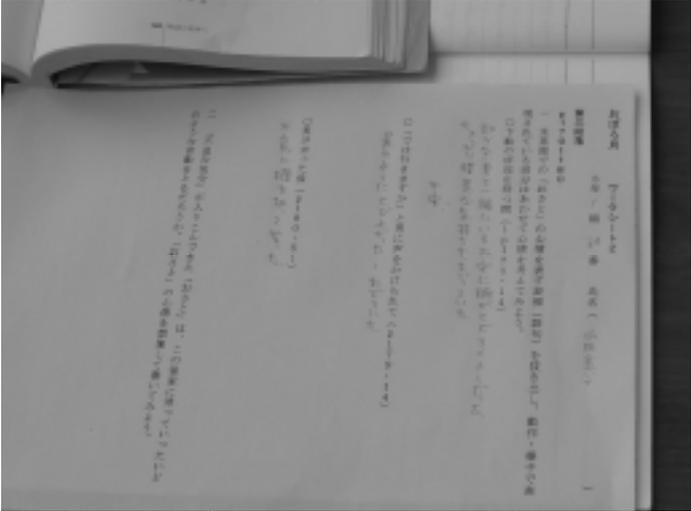
5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
読む能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識・理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準(観点) 《 評価方法 》
R	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の進め方を確認し、学習の見通しを立てる。 ・本単元での学習目標を確認する。 ・作者と作品について学習する。 ・全文を音読後、初発の感想を簡単にまとめる。 ・全文の構成を考える。 ・語句の意味が不明なものについて確認する。 	常用漢字の読みを確認する。 なじみのない語句(縁談、駆け落ち、など)や慣用的な表現の意味をワークシートで確認し、慣用的な表現については短文を作らせる。 <div style="text-align: center;">  </div>	ワークシートは p.36 をご覧ください。

<p>1 ・ 2</p>	<p>・第1段落を読解する。 時代背景や社会状況、人々の暮らし ぶりを読み取る。 表現から時代設定を読み取る。 時間帯、主人公の置かれた状況から 心情を読み取る。</p>	<p>場面や主人公の設定の仕方を捉え させる。 主人公の行動に関する記述や主 人公の置かれた状況に対する記 述から時代設定と主人公の年齢 設定を読み取らせる。 友人との関係を主人公と友人の 置かれた状況の比較から読み取 らせる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D 1】 p.15 ワークシート</p> </div>	<p>(読む能力) 《発言・ノ ート》 (知識・理 解) 《観察・ワ ークシート チェック》</p>
<p>3 ・ 4</p>	<p>・第2段落を読解する。 ペアワーク、グループワークで、主 人公の友人に対する心情を読み取 る。 ペアワーク、グループワークで、友 人との比較から主人公の心情を読 み取る。 ペアワーク、グループワークで、転 んだ主人公の心情の変化を読み取 る。</p> <div style="text-align: center;">  <p>《ペアワークの様子》</p> </div>	<p>主人公の心情の変化を捉えさせる。 友人の置かれた状況を、端的な表 現を指摘させることで読み取ら せる。 主人公の結婚に対する思いを記 述から読み取らせる。 友人との比較から主人公が感じ ている心情を読み取らせる。 主人公の心情に対する感想をま とめさせる。(ワークシート) 転んだ主人公の心情を読み取ら せる。 助けてくれた男に対する主人公 の心情を読み取らせる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D 1・2】 p.15 ワークシート、授業形態</p> </div>	<p>(関心・意 欲・態度) 《観察・ワ ークシート チェック》 (読む能力) 《観察・ワ ークシート チェック》</p>

5	<p>・第3段落を読解する。 水茶屋での主人公の心情を読み取る。 主人公の期待を読み取る。 男の言動に対する主人公の心情を読み取る。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>詳しくは、「8 本時の展開」 (p.34)で説明します。</p> </div>	<p>主人公の心情の変化を捉えさせる。 主人公の心情を捉え、端的な単語で表現させる。(ペアワーク、グループワーク)</p> <p>結びの「不^ふ逞^{てい}な気分」を読み取り、その後の主人公の言動を想像し文章化させる。(ワークシート、発表)</p> <div style="text-align: center; margin: 20px 0;">  </div>	<p>(読む能力) 《観察・ワークシートチェック》</p> <div style="border: 1px dashed black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 20px auto; width: fit-content;"> <p>ワークシートは p.36をご覧ください。</p> </div>
			

7 評価規準に照らした生徒の学習状況 (本時で評価する部分のみ)

【読む能力】

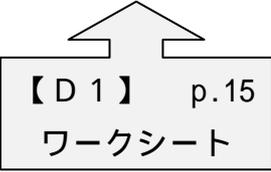
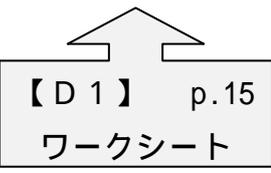
学習活動における具体の評価規準	主人公の心情の変化を踏まえて、主人公の言動を想像し文章化することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	主人公の心情の変化を踏まえて、主人公の言動を的確に想像し、正確な表現で記述できている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	主人公の心情の変化を確認させ、自分自身の体験に照らして想像を働かせるように指示する。

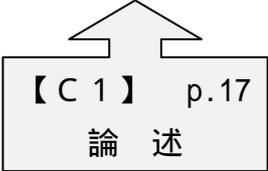
8 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・主人公の心情の変化を捉え、その後の行動を想像して文章化する。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準(観点)《評価方法》
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの流れを振り返る。 ・本時の学習活動について理解する。 	<p>前時までの流れを説明する。</p> <p>本時の学習活動について説明する。</p>		
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> ・水茶屋での主人公の心情を読み取る。 ・主人公の期待を読み取る。 ・男の言動に対する主人公の心情を読み取る。 ・ペアワーク、グループワークで、主人公の心情に関して意見交換し、相互理解を図る。 ・ペアワーク、グループワークを通して整理した主人公の心情をワークシートに記入する。 	<p>主人公の心情に関する記述を本文中から確認する。</p> <p>どのような心情を表すかを考えさせる。</p> <p>心情を表す語句を複数挙げるよう指示する。</p>	<p>心情を表す語句に注意して読ませる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D1】 p.15 ワークシート</p> </div> <p>ペアワーク、グループワークで、心情に対する相互の理解を共有させる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D2】 p.15 授業形態</p> </div> <p>読み取った主人公の心情をワークシートに記入させる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D1】 p.15 ワークシート</p> </div>	<p>(読む能力)《観察・ワークシートチェック》</p> <div style="border: 1px dashed gray; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: auto; margin-right: auto;"> <p>ワークシートはp.36をご覧ください。</p> </div>

ま と め 15 分	<ul style="list-style-type: none"> ・男の言動に対する主人公の心情を読み取る。 ・結びの「不逞な気分」を読み取り、その後の主人公の言動を想像し文章化する。 	<p>「不逞な気分」の内容を確認し、自分の経験を想起させる。</p> <p>自己の経験に照らして、その後の主人公の言動を想像させる。</p>	<p>主人公の心情について、自己の体験との共通性を意識させる。</p> <p>結びの「不逞な気分」を読み取り、その後の主人公の言動を想像し文章化させる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【C1】 p.17 論 述</p> </div>	(読む能力) 《観察・ワークシートチェック》
------------------------	--	--	---	---------------------------

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本 (既習事項)	成果	<p>これまでも表現に即した心情の読み取りは指導してきたが、今回は、ワークシートを活用し、ペアワーク、グループワークによって学習を進めたことで、主人公の言動を想像し文章化できている生徒の割合が高まった。振り返りの中で、「ワークシートを使ったので心情の描写がよく読めてよかった。」「グループワークでは自分の考えを少し見直すことができた。」という感想が見られた。</p>
	課題	<p>ペアワーク、グループワークに対して積極的に取り組めない生徒を授業に取り込む工夫が必要であった。自分の考えを筋道立てて述べる、というのは一朝一夕にできることではないので、年度当初から計画的に、根気強く指導していくことが大切である。</p>
本単元における基礎・基本	成果	<p>語句の意味の確認等を通して理解を促したので、表現から主人公の状況、心情を的確に読み取り、文章化することに結び付けていた。</p>
	課題	<p>キーワードである「不逞な気分」に対する理解が十分でない生徒に対して、具体的な提示等で理解を補助する必要がある。ここが分からなければ全体が分からない、というところをいかに指導するかがポイントであることを痛感した。</p>
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		<p>生徒の語彙力に課題があるため、語句の意味等を丁寧に確認しながら授業を進めていくことが必要である。また、ペアワーク、グループワークに関しては、日頃から、自分の考えを述べる場面を意図的に設けることや、自由に発言ができ、またどんな発言でもきちんと受け止めるクラスの雰囲気作りが大切である。</p>

おぼろ月 語句の意味の確認

おぼろ月 語句の意味の確認
3年 組 番 氏名 ()

一次の語句の意味に適する語を答えなさい。
語群①～④ 結婚 帰る 会話 口数 気がね よそ

P1770 ①口をはさむ 他人の () 「に横から刺り込む」

P1771 ②縁談 結婚者を挙げてする () 「や婿養子縁組みの話」

P1772 ③駆け落ち 結婚を許されない男女が () 「の土地に逃れること」

P1773 ④限をはばかり () 「する。遠慮する」

P1774 ⑤家路をいそぐ いそいで自分の家へ () 「

P1775 ⑥落胆 () 「が少ないこと」

語群の①～④ 恐怖 いいかげん 方法 他 の事 下品

P1775 ⑦下車た 言動が () 「になる。下劣に見える」

⑧鳥肌が立つ 寒さや () 「などによって皮膚が、羽をむしり取った鳥の皮のようにぶつぶつになる」

P1776 ⑨おざなり () 「に物事をすませること」

P1777 ⑩上の空 () 「に心が奪われて、そのことに注意が向かないこと」

P1777 ⑪途方に暮れる () 「が戻きて、どうしてよいかわからなくなる」

語群の①～④ 親しく 見かけ 勝手 不思議 回る 安心

P1778 ⑫風采 容姿・服装・態度などの、人の () 「上のようす」

P1779 ⑬眼がくらむ 濃度の刺激を受けて、目が () 「めまいがする」

P1779 ⑭思慮にする () 「交際していること、仲よくつきあうこと」

P1800 ⑮怪訝そう () 「で納得がいかないこと」

⑯安堵 気がかりなことが除かれ、 () 「すること」

⑰不逞 () 「に振る舞うこと、道義に従わないこと」

おぼろ月 ワークシート

おぼろ月 ワークシート2
3年 組 番 氏名 ()

第三段落
P1799～1800

一 水茶屋での「おさと」の心情を表す表現(語句)を抜き出し、動作・様子で表現されている部分はあわせて心情を考えてみよう。

○下駄の修理を待つ間(～P179・14)

○「では行きますか」と男に声をかけられて(P179・14)

○男が去った後(P180・5)

二 「不逞な気分」が入りこんできた「おさと」は、この後家に帰っていったいどのような言動をとるだろうか。「おさと」の心情を想像して書いてみよう。

事例3 数学(数学)

- 1 学年・科目名 1 学年・数学
- 2 単元名(使用教科書名) 二次関数のグラフ
(改訂版 新編数学 : 数研出版)

3 単元の目標

・二次関数について理解し、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識するとともに、それを具体的な事象の考察に活用できるようになる。

4 単元について

本単元を理解するのに必要な基礎・基本(既習事項)

- ・関数の定義 中2
- ・座標平面における点の座標の表し方 中1
- ・数量の関係や関数関係をグラフに表すこと 中1、2、3
- ・平方完成の方法 中3、高1
- ・二次方程式の解法 中3、高1

中 は中学校既習事項、高 は高等学校既習事項、数字は学年を表す。

本単元における基礎・基本

- ・二次関数のグラフの形状及び二次関数の増加減少について理解すること。
- ・二次関数における定義域と値域の関係を理解し、活用すること。

(1) 単元観

中学校では、具体的な事象の考察を通して、比例・反比例、一次関数、及び関数 $y = ax^2$ を学習し、それらを基にして具体的な問題の解決を図ることを学んできている。特に、関数 $y = ax^2$ については、「事象の中には関数 $y = ax^2$ として捉えられるものがあることを知ること」、「関数 $y = ax^2$ のグラフの特徴と関数のとる値の変化の割合について理解すること」を学習している。ただし、「二次関数」という用語は扱っていない。本単元では $y = ax^2$ のグラフを、再度座標平面上に点をプロットすることを通して形状を確認し、これを基に $y = ax^2 + bx + c$ で表される一般的な二次関数のグラフを考察する。さらにそれらの基礎・基本を踏まえ、具体的な問題への活用を図る。また、図形の基本的な性質を活用して二次関数の最大・最小問題のいろいろな解決方法を探究し、平面図形への興味・関心を育む。

(2) 生徒観

関数については中学校から扱っているが、関数が苦手、もしくは分からないという生徒が少なくない。関数は身近に見られる二つの変化する量についての関係であるといった実感が伴っていない。その原因の一つは、方程式との違いが明確でないことが考えられる。

関数とは何かの確認と身近な素材を用いた二つの変化する量の数式化の演習を通じた理解が必要な状況にある。また、「H21 学習状況調査」の結果に見られるように、二次関数の一般形を標準形に変形することが苦手な生徒が多いことに配慮し、式変形の基本を定着させる必要がある。

(3) 指導観

ア 関数とグラフ

関数及びそのグラフについては、中学校で既に学習済みであるが、関数が分からない、または、難しいと感じている生徒が少なくない。原因の一つとして、方程式と関数の違いを理解していないことが考えられる。したがって、関数が二つの変化する量の関係を表したものであることを確認する必要がある。関数のグラフについては、変化する二つの量の具体的な対を点として座標平面上にプロットしたものの集合であるという基本を確認する必要がある。

イ 二次関数のグラフ（標準形）

$y = ax^2$ について変化する二つの量の具体的な対を表にまとめることを通して、関数の「一つの量を決めると、もう一つの量が一つ決まる」という、基本性質を実感させる。

さらに、対を点として座標平面上にプロットすることで、グラフの形状を体験的事実として認識させる。 $y = a(x-p)^2$ については $y = \beta$ に対する x の値と、 $y = ax^2$ についてと同じ $y = \beta$ に対する x の値を比較し、それぞれの点の位置関係を考えることを通して、 $y = ax^2$ と $y = a(x-p)^2$ の位置関係を考察させる。その際、二次方程式の解法の復習を行い、基礎・基本の定着を図りたい。

$y = a(x-p)^2 + q$ については同じ x の値に対する $y = a(x-p)^2$ と $y = a(x-p)^2 + q$ の y の値を比較し、それぞれの点の位置関係を考えることを通して、 $y = a(x-p)^2$ と $y = a(x-p)^2 + q$ の位置関係を考察させる。これらの考察を通し、これらのグラフは全て放物線と呼ばれる曲線になることを認識させる。

指導に当たっては、「生徒による授業評価」に見られる「自ら考える時間があまりない」という感想を考慮し、一方的な授業とならないように進度にゆとりを持たせ、まず生徒自身が考え、発言できるよう配慮する。

ウ 二次関数（一般形）の標準化

$y = ax^2 + bx + c$ が標準形に変形可能であることを指導し、その結果、二次関数のグラフが全て放物線となることを認識させる。式変形の指導に当たっては、既習事項が活用できることを確認し、これまでの学習内容を活用しようとする姿勢を促す。

エ 二次関数の増減

関数のとる値の変化については、中学校で一次関数及び関数 $y = ax^2$ に対して学習している。生徒の中には、一次関数のグラフの状況を短絡的に二次関数にも適用してしまい、定義域の端点で必ず最大値または最小値をとるものと認識しているものが少なくない。二次

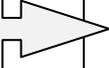
関数における増減が一次関数と異なり、定義域の端点のみで最大値または最小値をとるものではないことをグラフの形状から認識させる。

5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	二次関数で表される様々な現象を、グラフを用い解析することを通して数学的活動の楽しさを実感し、積極的に問題解決に活用しようとする。
数学的な見方や考え 方	どのような現象が二次関数として表現できるかの見通しを立て、二次関数の基本的知識を基に、状況を予測・解析することができる。
表現・処理	一般的な二次関数を標準形に変形することができ、標準形における二次関数の基本的な知識を基に処理し、必要な情報を得ることができる。
知識・理解	二次関数のグラフについて、増減、線対称の軸、頂点などの基本的知識を理解している。

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》
R	<ul style="list-style-type: none"> 関数の定義を確認する。 座標平面上の点の表し方を確認する。 	<p>具体例を通して、関数の定義を理解させる。</p> <p>道案内などの例を通して、点の表し方を理解させる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【R3】 p.14 発問</p> </div>	
1	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな事象を表す関数の中には、二次関数として捉えられるものがあることを知る。 記号 $f(x)$ の使い方を理解する。 	<p>身近な事例を通して、変化する二つの変数の関係を考察させる。</p> <p>記号 $f(x)$ の利便性を理解させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 身近な具体例を考察しようとする。（関心・意欲・態度）《授業観察》 記号 $f(x)$ を活用して処理することができる。（表現・処理）《授業観察》

2	<ul style="list-style-type: none"> 一次関数のグラフを復習する。 定義域、値域の意味を理解する。 一次関数の最大・最小について確認する。 いろいろな関数のグラフについて最大値・最小値を考察する。 	<p>グラフが点の集合であることを理解させ、一次関数特有のグラフの性質及び描き方を理解させる。</p> <p>定義域、値域の意味を理解させ、値域の範囲から一次関数の最大値・最小値を求めさせる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【R3】 p.14 発問</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 2点を求めて一次関数のグラフを描くことができる。(表現・処理)《課題による見取り》 いろいろな関数をグラフで表すことができる。(数学的な見方や考え方)《授業観察》
3 ・ 4	<ul style="list-style-type: none"> 二次関数 $y = ax^2$ のグラフについて軸、頂点、増減などの特徴を理解する。 $y = a(x-p)^2$ のグラフ及び $y = a(x-p)^2 + q$ のグラフと、$y = ax^2$ のグラフとの位置関係を理解する。 <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>【D4】 p.16 机間指導</p> </div>  </div>	<p>2変数の関係を表にまとめることで二次関数の特徴を考察させる。</p> <p>2変数の関係を座標平面上に点をプロットすることを通して、その形状を体験的に把握させる。</p> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <div style="border: 1px dashed black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>詳しくは、p.46をご覧ください。</p> </div> </div> <p>同じ y 座標 β に対する $y = ax^2$ と $y = a(x-p)^2$ の x 座標の比較を基に、グラフの位置関係を理解させる。</p> <p>二次方程式の解法の復習を行う。</p> <p>同じ x 座標 α に対する $y = a(x-p)^2$ と $y = a(x-p)^2 + q$ の y 座標の比較を基に、グラフの位置関係を理解させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 2変数の対応表から点を座標平面にプロットする。(関心・意欲・態度)《授業観察》 放物線についての基本的な性質を理解し、自分の言葉で整理する(知識・理解)《「マイメモシート」による見取り》 二つのグラフの位置関係を考察できる。(数学的な見方や考え方)《授業観察》 $y = \beta$ に対する x の値を計算できる。(表現・処理)《授業観察》 $y = a(x-p)^2 + q$ における a、p、q の意味を理解している。(知識・理解)《「マイメモシート」による見取り》

5	<ul style="list-style-type: none"> • $y = ax^2 + bx + c$ を標準形に直す方法を理解する。 • 与えられた定義域における二次関数の最大値・最小値を求める。 <div data-bbox="363 551 643 667" style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>【D1】 p.15 ワークシート</p> </div>	<p>平方完成の方法を復習し、平方完成を通して、全ての二次関数が標準形に直せることを理解させる。</p> <p>定義域によって二次関数の増減が異なることを理解させ、軸と定義域の位置関係により五つのパターンで最大・最小が求められることを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 平方完成ができる。(表現・処理)《授業観察》 • 軸と定義域の位置関係を基に最大・最小を考察し、その結果を整理できる。(表現・処理)(知識・理解)《「マイメモシート」による見取り》
6	<ul style="list-style-type: none"> • 円に内接する長方形の面積の最大値を求める。 作図する。 予想する。 • 1辺の長さを x とし、その定義域を求める。 • 他の1辺の長さを x で表現する。 長方形の面積を式で表現する。 変数の置き換えをし、二次式に変換する。 二次関数のグラフを描く。 グラフより結論を導く。 • 異なる解法(別解)についてグループで検討する。 • 解法に至るプロセスを理解し整理する。 <div data-bbox="284 1906 678 2011" style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>詳しくは、「8 本時の展開」(p.42) で説明します。</p> </div>	<p>状況を把握するために作図をする。その際、対角線が円の中心を通ることを理解させる。</p> <p>長方形の1辺の長さを x とおき、その変域(定義域)を考察させる。</p> <p>他の1辺の長さが三平方の定理を用いて表現できることを理解させる。</p> <p>最大・最小を考察する際には、変化する部分に注目すればよいことを理解させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 円に内接する長方形の面積が最大となる時、その形状が正方形であることを考察し説明できる。(数学的な見方や考え方)《「マイソリューション」による見取り》 • 面積が二次関数で表現されるプロセスを理解し、二次関数に関する基礎知識を基に最大値を求めることができる。(知識・理解)《「マイソリューション」による見取り》 <div data-bbox="802 1794 1054 1895" style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>詳しくは、p.46 をご覧ください。</p> </div>

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【 数学的な見方や考え方 】

学習活動における具体的評価規準	円に内接する長方形の面積が最大となる時、その形状が正方形であることを考察し説明できる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	円に内接する長方形の面積の最大値を求める問題に対し、異なる解法を考察できる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	一本の対角線を固定したとき、面積を最大にするほかの対角線を考察するよう助言する。その際、弦の垂直二等分線と円の中心との関係を復習する。

【 知識・理解 】

学習活動における具体的評価規準	面積が二次関数で表現されるプロセスを理解し、二次関数に関する基礎知識を基に最大値を求めることができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	1辺の長さを x としたとき、三平方の定理を用いて他の辺の長さを x を用いて表現できる。さらに、面積の2乗が x の複二次式であることに注目し二次関数に置き換えて、二次関数の知識を基に最大値を求めることができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	「マイメモシート」を活用し、三平方の定理や定義域が与えられたときの二次関数の最大・最小についての基礎・基本を復習する。

8 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・二次関数を利用して、円に内接する長方形の面積の最大値を求める問題を解決する。
- ・円に内接する長方形の面積の最大値を求める問題に対し、異なる方法で考察する。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

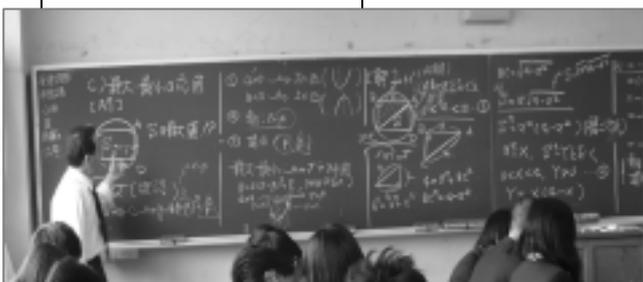
過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》
導入 7分	・二次関数のグラフの特徴を復習する。	全ての二次関数は標準形に直せること及びグラフは全て放物線になること、さらに標準形と軸の方程式、頂点の座標との関係を確認する。	二次関数のグラフは全て放物線となることを確認し、軸の方程式、頂点の座標を標準形から読み取ることができるようにする。（「マイメモシート」の活用）	【D1】 p.15 ワークシート

	<p>・定義域と最大・最小の関係を整理し確認する。</p>	<p>軸と定義域の位置関係により五つのパターンで最大・最小が求められることを確認する。</p>	<p>放物線の対称性から対称線（軸）と定義域の位置関係を分類できるようにする。（「マイメモシート」の活用）</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>【D1】 p.15 ワークシート</p> </div>
<p>展開 35分</p>	<p>・円に内接する長方形の面積の最大値を求める。</p> <p>作図する。 予想する。</p> <p>1辺の長さを x とし、その定義域を求める。 他の1辺の長さを x で表現する。</p> <p>長方形の面積を式で表現する。 変数の置き換えをし、二次式に変換する。</p> <p>二次関数のグラフを描く。</p> <p>グラフより結論を導く。</p>	<p>本時の概要を説明する。</p> <p>状況把握のために作図を行う。その際、対角線が円の中心を通ることを確認する。</p> <p>三平方の定理を確認し、これを用いて他の1辺の長さが求められることを解説する。</p> <p>長方形の面積を式で表現させる。 表現された式が置き換えにより二次関数になることを説明する。</p> <p>グラフを用いて最大値、及びそのときの長方形の形状を考察させる。</p>	<p>状況を的確に把握できる簡潔かつ有効な作図ができるようにする。</p> <p>与えられた条件より x の変域（定義域）を考察させる。 直角三角形に注目させ、三平方の定理を活用できるようにする。</p> <p>面積の2乗の式が x^2 の項で構成されていることに着目し、置き換えにより二次式に変換できることを理解させる。 標準形への変形ができるようにする。 グラフの基本的知識を基に、適切なグラフを描けるようにする。</p>	

ま と め 8 分	・二次関数によらない解法をグループで考察する。	他の解法をグループで考察させ、発表させる。	これまで学んできた数学の知識を駆使して検討させる。	・円に内接する長方形の面積が最大となるとき、その形状が正方形であることを考察し説明できる。(数学的な見方や考え方)《「マイソリューション」による見取り》
	・身近な図形の面積問題について二次関数に結び付くものが多いことを認識する。 ・解法に至るプロセスを理解し整理する。	類似の問題を紹介する。 解答に至るプロセスの確認をする。	解答に至るプロセスを自分なりに整理させ、「マイソリューション」に記述させる。	・面積が二次関数で表現されるプロセスを理解し、二次関数に関する基礎知識を基に最大値を求めることができる。(知識・理解)《「マイソリューション」による見取り》



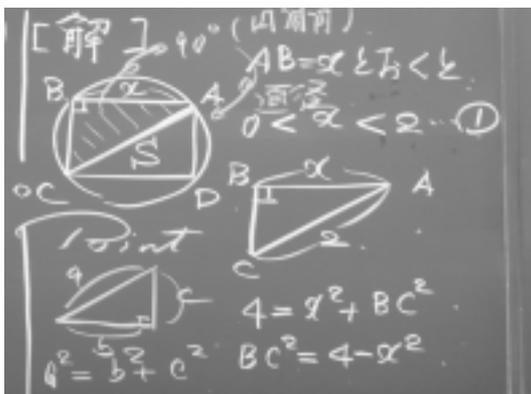
【D2】 p.15
授業形態



【C2】 p.17
振り返りシート

公式等のポイントを板書し、授業の終わりで消さずに残しておき、まとめの際に活用する。

【D3】 p.15
板書



三平方の定理を確認し、これを用いて他の1辺の長さが求められることを解説します。

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）	成果	「関数の定義」、「座標平面における点の座標の表し方」、「数量の関係や関数関係をグラフに表すこと」については、中学校での既習事項であるが、具体例を通して復習を行った。その結果、生徒が授業内容を理解しようとする意欲の高まりが見られた。また、「平方完成の方法」、「二次方程式の解法」については、高等学校1学年（一部は中学校3学年）での既習事項であるが、問題解決の場面で復習、活用することにより、その有用性を気付かせる指導を行った。その結果、重要事項を理解し記憶することの必要性を再認識した生徒が多く見られた。
	課題	「平方完成の方法」や「二次方程式の解法」の定着度に生徒間で差があった。今後も、問題解決の場面で繰り返し復習、活用することによって定着を図る必要がある。
本単元における基礎・基本	成果	二次関数における増減が一次関数と異なり、定義域の端点のみで最大値または最小値をとるものではないことをグラフの形状から認識させることの指導を徹底した。軸と定義域の位置関係により五つのパターンで最大・最小が求められることを確認し、自分の言葉で「マイメモシート」に整理させることによって定着を図った。工夫して「マイメモシート」を作成し自分の考えをまとめるなどの言語活動の充実を図った結果、それを活用して自ら問題を解決しようとする姿勢が見受けられた。また、授業の導入時にその時間に使う重要事項を復習し、公式等を板書して残しておくことにより、重要事項の定着、活用を図った。その結果、教員の説明が効率的になるとともに、生徒の重要事項に対する認識も深まった。
	課題	最大・最小の応用問題において、自ら導入した変数の定義域を考察できない生徒が多い。「マイソリューション」の更なる活用などによって、自ら変数の定義域を考察できるように指導していきたい。
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点	<p>「マイメモシート」、「マイソリューション」の更なる活用によって、自ら工夫して学習に取り組む姿勢や意欲を育ていきたい。</p> <p>グループによる解法の考察及び発表の取組みは、「他の人の考えを聞くことができ良かった」という生徒の意見があったが、準備や取組みに対する説明が不十分であった。更に学び合いの視点を入れた授業を展開し、基礎・基本の定着を図っていきたい。また、週末補習及び週末課題等の実施により、授業中だけでは定着が図りにくい基礎・基本の定着度を高めていきたい。</p>	

「マイメモシート」と「マイソリューション」

マイメモシート	重要度
Field (単元名)	記入日 通し番号 No
2 次関数のグラフ	1 0 月 2 1 日
用語 ・ 定義 ・ 公式 ・ その他	
----- 関数とは・・・ -----	
----- 変化する二つの数 (変数) の関係を表したもので、一方の値が決	
----- まるとそれに対するもう一方の値がただ一つ定まるものを指す。-----	
----- 関数のグラフとは・・・ -----	
----- 関数関係にある二つの変数の対 (x と y のペア) を座標平面上に点	
----- で表した (プロットした) ものの集合。-----	
----- 2 次関数のグラフの特徴は・・・ -----	
----- 放物線と呼ばれる曲線で、軸に関して線対象。-----	
----- ax^2+bx+c を平方完成すると・・・ -----	
$ax^2+bx+c = a\left(x + \frac{b}{2a}\right)^2 - \frac{b^2 - 4ac}{4a}$	
----- 三平方の定理とは・・・ -----	
----- 直角三角形においては斜辺の二乗が他の二辺の二乗の和に等しい。-----	
氏名	

基礎・基本を定着させるために、生徒が自分なりに工夫して重要事項を整理するために用いたシートです。

基礎・基本を定着させるために、問題の解法に用いた公式や解答手順、別解等を自分なりに工夫して整理するために用いたシートです。

マイソリューション		難易度
教科書・問題集		○ ○ ○ ○ ○
P. No.	記入日	
	月	日
使用した公式等		
解答手順		
別解		
氏名	理解度	%

ろいろな事象の考察に積極的に活用できるようにすることを目標としている。

また大学においては、この分野は線形代数学として体系化され、微分積分学とも融合してベクトル解析へとつながっていく。

そこで、ベクトルについての基本的な概念を理解させる際、「ベクトルは『向き』と『大きさ』だけで定まる量」として指導する前に、「ベクトルとは幾つかの数を並べて括弧をつけたもの」という多次元量として導入した。その中で、2次元、3次元のベクトルが、それぞれ平面図形、空間図形の考察に有効であるという全体像を捉えさせたい。

これらを踏まえた上で、位置ベクトル、直線及び円のベクトル方程式、ベクトルの図形への応用を指導したい。

特に、内積については、その図形的な意味も含めて復習し、図形の考察において積極的に活用できることを目指したい。また、これまで扱ってきた初等幾何や解析幾何の問題をベクトルで処理することを通して、ベクトルの有用性を認識させ、これを積極的に活用することで、本単元の基礎・基本の定着を目指したい。

(2) 生徒観

中学校までの図形に関する指導内容はほぼ定着していて、生徒の学習意欲も高く授業にも積極的に取り組んでいる。更に力を伸ばすためには、生徒が自ら課題を見付けて考察することが必要である。既習事項の基礎・基本の定着については、復習の効用を説くだけでなく、課題プリントや自習プリントなどを課す、重要事項を「ポイントカード」に整理して黒板で確認する、自作教具を工夫するなどの指導を行っている。

(3) 指導観

図形の問題を扱う際には、生徒がイメージを持ちやすいような教材・教具を工夫し、活用していきたい。「生徒による授業評価」から、具体物を使った授業に興味を持って取り組めた様子が見えるので、教具を工夫して分かりやすい説明を心掛け、基礎・基本が定着するように努めたい。また、要点を整理した画用紙サイズの「ポイントカード」も基礎・基本の定着の一助を担っていることも「生徒による授業評価」から読み取ることができた。引き続き「ポイントカード」で知識の整理をしながら授業を進めたい。一方、「生徒による授業評価」では「授業の進行が速い」という感想を書いた生徒もいたので、生徒の理解状況を確認しながら、授業を進めたい。

ア 位置ベクトル

平面上に基準点 O を定め、任意の点 P に対し、 \overrightarrow{OP} を考える。このとき $\overrightarrow{OP} = \vec{p}$ を点 O に関する点 P の位置ベクトルということの指導を徹底する。このとき、平面上の2点 A 、 B に対し、 \overrightarrow{AB} は位置ベクトルを用いて $\overrightarrow{AB} = \vec{b} - \vec{a}$ で表される。このことから、位置ベクトルを用いて平面図形のいろいろな性質を証明できることを理解させる。

さらに、数学で扱った内分点、外分点なども位置ベクトルで表現できるように指導する。

イ ベクトルと図形

「3点A、B、Cが一直線上にある ある実数 k があって $\overrightarrow{AC} = k \overrightarrow{AB}$ 」という事項の指導に際しては、 $\overrightarrow{AC} // \overrightarrow{AB}$ で2つのベクトル \overrightarrow{AC} 、 \overrightarrow{AB} を表す有向線分の始点と同じであることに留意させる。

また、ベクトルの分解の一意性に十分注意させ、諸問題に活用できるように定式化する。

ウ ベクトル方程式

ベクトル方程式で図形を表すことや、媒介変数を用いた方程式は、生徒にとって理解しにくいところがあるので、演習を通して理解を促したい。また、直線のベクトル方程式における媒介変数を消去することで、中学校で学んだ直線の方程式に帰着することを確認させることにも留意する。

また、直線のベクトル方程式を用いて、直線 $ax + by + c = 0$ の法線ベクトルは、 $\vec{n} = (a, b)$ 、方向ベクトルは $l = (b, -a)$ であることを理解させる。

さらに、円の定義から円のベクトル方程式を求めさせる。

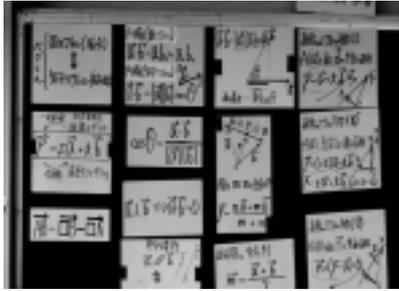
エ ベクトルの利用

ベクトルを使って解析幾何、初等幾何に関する問題を考えることを通して、ベクトルの有用性を理解させる。

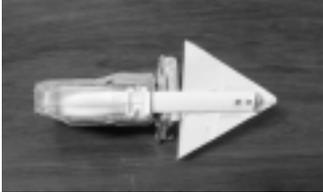
5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	ベクトルの考え方に関心を持つとともに、数学的な見方や考え方の良さを認識し、それらを事象の考察に活用しようとする。
数学的な見方や考え方	ベクトルにおける見方や考え方を身に付け、事象を数学的に捉え、論理的に考えるとともに思考の過程を振り返り、多面的・発展的に考えている。
表現・処理	図形の問題をベクトルで表現・処理する仕方や推論する方法を身に付け、解決することができる。
知識・理解	ベクトルの基本的な概念、公式、用語、記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《 評価方法 》
R		線分の内分点・外分点、三角形の重心について復習する。 	
1 ・ 2	・位置ベクトルの考え方を理解し、線分の内分点・外分点、三角形の重心の位置ベクトルを表す公式を理解する。	位置ベクトルの意味を理解させる。 線分の内分点・外分点、三角形の重心について位置ベクトルを用いて表すことができるようにする。	・位置ベクトルの意味を理解し、与えられた点の位置ベクトルを表現することができる。（表現・処理）（知識・理解）《授業観察》
3	・位置ベクトルを用いて平面図形の性質を証明する。	図形の頂点を位置ベクトルで表すことで、図形の性質を考察することができることに留意させる。	・位置ベクトルの考え方に関心を持ち、数学的な見方や考え方の良さを認識し、考察に活用しようとする。（関心・意欲・態度）《授業観察》
	・3点が一直線上にある条件をベクトルによって表現し、証明問題に活用する。	3点が一直線上にある条件をベクトルで表すことができるようにする。	・具体的な問題を数学的に捉え、論理的に考えることができる。（数学的な見方や考え方）《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》
4 ・ 5	・平面上の任意のベクトルは、二つの平行でなく $\vec{0}$ でないベクトルの和で一意的に表されることを活用して、具体的な問題を解く。	線分上の点を、線分を $s : (1 - s)$ に内分する点として処理できるようにする。	・一つのベクトルを二通りに表し、表現の一意性を用いて数学的に処理できる。（表現・処理）（知識・理解）《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》
	・内積を使って図形の問題を解く。 	「ポイントカード」を用いて、内積の定義と意味を復習し、図形の問題に活用できるようにする。 	・図形の問題を内積を活用して考えることができる。（数学的な見方や考え方）《授業観察》

重要事項を復習・整理するための「ポイントカード」です。

6	<ul style="list-style-type: none"> 直線のベクトル方程式を理解する。 	直線のベクトル方程式の考え方を理解させる。 <div style="text-align: center;">  <p>【D5】 p.16 教材・教具</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 直線のベクトル方程式を、媒介変数を用いて表示することができる。(表現・処理)《授業観察》
直線のベクトル方程式を理解させるために作成した教具です。実際に使用した様子は、p.53を参照してください。			
	<ul style="list-style-type: none"> 法線ベクトルを用いて2直線のなす角を求める。 	法線ベクトルを用いて2直線のなす角を求める方法を理解させる。	
7	<ul style="list-style-type: none"> ベクトルを用いて円の性質を考察し、円や円の接線のベクトル方程式を理解する。 	円の定義を再確認し、円周上の点Pの位置ベクトル \vec{p} の関係式をつくることのできるようにする。 内積の図形的意味を復習する。	<ul style="list-style-type: none"> 円や円の接線のベクトル方程式を、正しく表現することができる。(表現・処理)《授業観察》
8	<ul style="list-style-type: none"> 図形の問題を、ベクトルを活用して解くことで、ベクトルの有用性を知る。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 詳しくは、「8 本時の展開」(p.52)で説明します。 </div>	数学 で学習した「点と直線の距離の公式」や、図形の問題をベクトルを活用して考察させる。	<ul style="list-style-type: none"> ベクトルの基本的な概念、公式、用語、記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。(知識・理解)《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》 図形の問題をベクトルで表現・処理する仕方や推論する方法を身に付け、解決することができる。(表現・処理)《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> 詳しくは、p.56をご覧ください。 </div>

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【 表現・処理 】

学習活動における具体の評価規準	図形の問題をベクトルで表現・処理する仕方や推論する方法を身に付け、解決することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	位置ベクトルと内積の意味を理解し、図形の問題を位置ベクトルや内積を活用して自ら表現し、解決できる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	3点が一直線上にあることを証明する問題などを復習し、図形の問題にベクトルを活用する方法を再確認する。

【 知識・理解 】

学習活動における具体の評価規準	ベクトルの基本的な概念、公式、用語、記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	位置ベクトル、内積の図形的意味などを理解し、図形の問題に活用できる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	基本的な問題を通して、位置ベクトル、ベクトルの演算、内積などについての基本事項を確認し、知識・理解を深める。

8 本時の展開

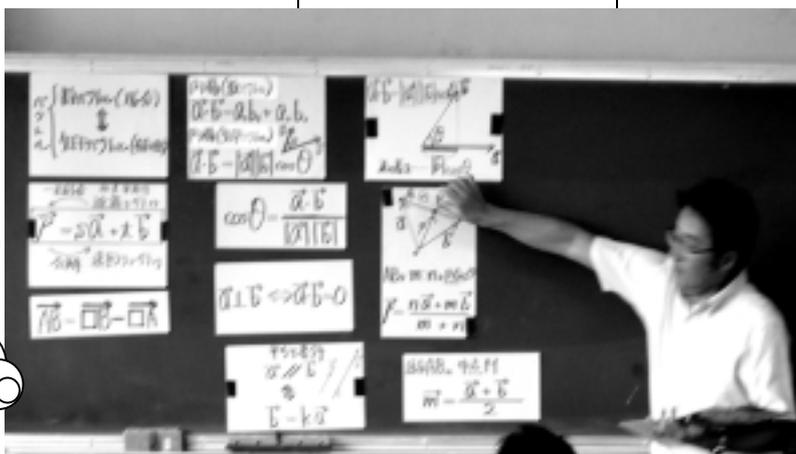
(1) 本時の目標

- ・「点と直線の距離の公式」の証明や図形の問題などにベクトルを活用し、ベクトルの有用性を理解する。
- ・証明の中で既習内容を振り返り、基礎・基本を確実に身に付ける。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《 評価方法 》
導入 7分	・これまでのベクトルの学習を振り返る。	<p>これまでの学習内容を「ポイントカード」で振り返り、学習の流れを確認する。</p> <p>図形の問題はベクトルを使うと見通しよく解決できることを確認する。</p>	<p>既習内容を系統的に理解するために、「ポイントカード」を黒板に並べて知識の整理を図る。</p> <div style="text-align: center;">  <p>【D3】 p.15 板書</p> </div>	

既習内容を系統的に理解するために、「ポイントカード」を黒板に並べて知識の整理を図ります。



・ワークシートの[問1]に取り組む。
[問1]
点A(1,4)と直線 $2x+3y-40=0$ の距離 d をベクトルを使って求める。

直線 $2x+3y-40=0$ の法線ベクトル \vec{n} を考える。
点Aから直線に下ろした垂線の足をHとすると、 $\overrightarrow{AH} = t\vec{n}$ で表されることを確認し、 $\overrightarrow{OH} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AH}$ から点Hの座標を t で表す。
点Hが直線上にあることから t の値を求め、 $d = |\overrightarrow{AH}|$ として d を求める。
この方法で公式を作ることができることを示唆する。

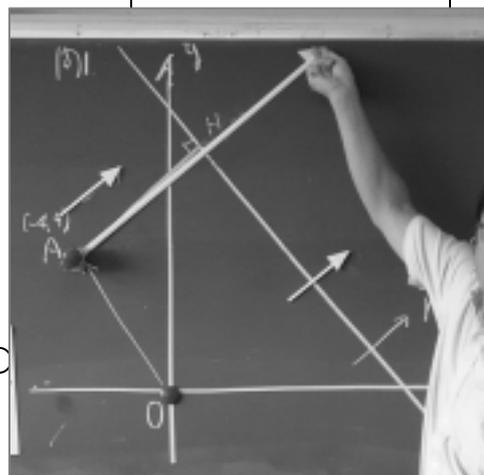
法線ベクトルの復習をする。
一つのベクトルは、二つの平行でなく $\vec{0}$ でないベクトルの和で一意的に表すことができることを確認する。
 t の値の変化によって点Hの位置の変化を考えさせることで、 $\overrightarrow{AH} = t\vec{n}$ という式が持つ意味を確認する。

・ベクトルの基本的な概念、公式、用語、記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。
(知識・理解)
《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》

【D5】 p.16
教材・教具

展開
40分

直線のベクトル方程式を理解させるために作成した教具を活用した様子です。



・ワークシートの[問2]に取り組む。

[問2]

「点と直線の距離の公式」をベクトルを使って証明する。

詳しくは、p.56
をご覧ください。

前時の円上の点における接線の方程式を考えたときの方法を振り返る。

内積の図形的な意味を踏まえて証明を考えさせる。

$$\vec{n} \cdot \vec{AP} = |\vec{n}| |\vec{AP}| \cos \theta = |\vec{n}| s$$

と変形する。ここで、 s は \vec{AP} の \vec{n} への正射影で、符号付きの長さで表すことができることを確認し、公式にある絶対値の必要性を強調する。生徒への発問を交え、一方的な説明にならないように留意する。

内積の図形的な意味を確認する。

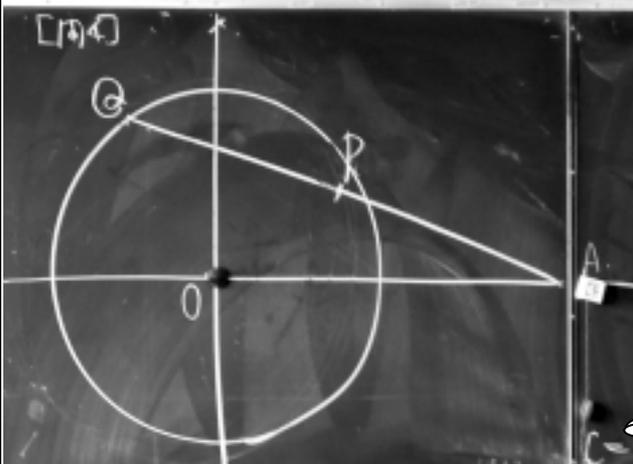
\vec{AP} を成分表示する際、

$\vec{AP} = \vec{OP} - \vec{OA}$ を使い、一つのベクトルは他の二つのベクトルの差で表すことができることを確認する。
正射影について復習し、理解を深める。

・自習課題の[問2]に取り組む。

[問2]

軌跡の問題をベクトルを活用して考える。



円のベクトル方程式や、線分の midpoint の位置ベクトルを復習する。

ベクトルの有用性を確認する。

円のベクトル方程式から、中心や半径を求める方法を確認する。

【D3】 p.15
板書

・図形の問題をベクトルで表現・処理する仕方や推論する方法を身に付け、解決することができる。
(表現・処理)《授業観察、ワークシートの見取り、テスト》

軌跡の問題を視覚的に理解させるために自作した教具を使用しました。

	<ul style="list-style-type: none"> ・自習課題の[問1]に取り組む。 <p>[問1]「直径の上立つ円周角は全て直角である」ことをベクトルを使って証明する。</p>	<p>円の性質をベクトルで証明することを考えさせる。</p>	<p>始点の取り方に留意させる。</p> <p>垂直関係を内積で表現させる。</p>	
まとめ 3分	<ul style="list-style-type: none"> ・ベクトルの有効性を確認する。 	<p>本時を振り返り、図形の問題はベクトルを使って考えると簡単に解くことができることを確認する。</p>	<p>自習課題の[問3]を宿題にする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【C3】 p.17 家庭学習プリント</p> </div>

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本 (既習事項)	成果	<p>「線分の内分点・外分点」、「三角形の重心」については、発問による生徒とのやり取りを通して既習事項を復習し、それらの内容をベクトルを活用して振り返った。その結果、生徒が授業内容を理解しようとする意欲の高まりが見られ、基礎・基本の定着に効果があった。また、既習事項の復習を「ポイントカード」を利用して行った結果、生徒から「授業で使った『ポイントカード』を全て見ることができ、関連性が分り知識がつながった。」という意見が聞かれた。生徒にインパクトを与えることができ、重要事項の定着に効果が見られた。</p>
	課題	<p>既習事項の復習の際、「ポイントカード」の羅列になってしまったため、知識を整理できない生徒が見受けられた。知識の整理を容易にするために「ポイントカード」を系統的に並べるなどの工夫が必要である。</p>
本単元における基礎・基本	成果	<p>「直線のベクトル方程式」、「ベクトルの図形への応用」の指導に際しては、自作教具を用いて視覚的・動的な説明を心掛けた。その結果、生徒の興味・関心を喚起し、基礎・基本の定着に効果があった。また、「ベクトルの図形への応用」の指導に際しては、自作プリントを用いて発展的な内容を取り入れ、生徒の学習意欲を高めるとともに、家庭学習を促すことを目指した。その結果、積極的に課題に取り組む姿勢が見られた。</p>
	課題	<p>「内積の性質」や「位置ベクトル」については、定着度に生徒間で差があった。今後も、問題解決の場面で繰り返し復習、活用することによって定着を図る必要がある。</p>
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		<p>本単元の学習を通して、ベクトルの活用によって既習事項や図形の問題が見通しよく、かつ代数的に表現・処理できることを強調した。その結果として、生徒に数学的な見方や考え方の良さを認識させ、それらを積極的に活用する態度を育むことを目指した。今後も新たな概念の導入に際しては、数学的な見方や考え方の良さを認識させ、それらを積極的に活用する態度を育むことに留意していきたい。また、言語活動の充実という視点から、生徒の学び合いの活動等を取り入れ、基礎・基本の定着を図っていきたい。</p>

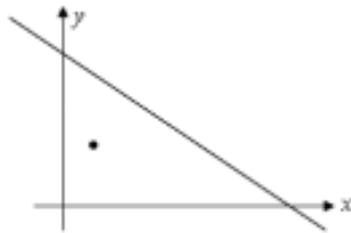
ワークシート

数学B ベクトルNo19
平面上のベクトル巻 2年 組 名前 _____

21 ベクトルの利用—点と直線の距離を考える—

[問1] 点A(1,4)と直線 $2x+3y-40=0$ の距離dを、ベクトルを使って求めよう。(2通り)

方法1



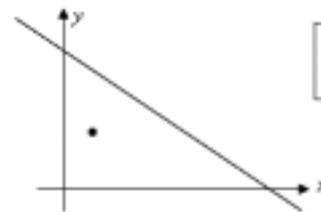
基礎基本の定着確認

法線ベクトル
直線のベクトル方程式
2直線の交点
2点間の距離の公式

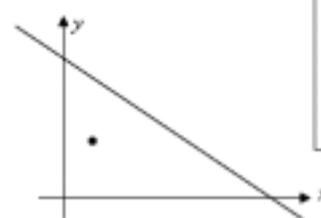
問1—方法①の一般化の中で
同様に基礎基本の定着確認

[問2] 点 $A(x_1, y_1)$ と直線 $ax+by+c=0$ の距離dは
 $d = \frac{|ax_1+by_1+c|}{\sqrt{a^2+b^2}}$ であることを、ベクトルを使って求めよう。(2通り)

方法1



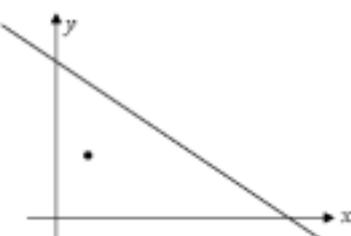
方法2



基礎基本の定着確認

内積の図形的な意味
符号付の正射影
 $ax+by+c=0 \Leftrightarrow \vec{n} \cdot \vec{p} = -c$
ただし $\vec{n}=(a,b)$

方法2



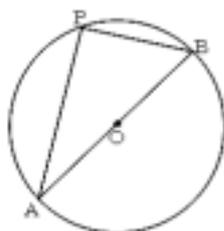
基礎基本の定着確認

位置ベクトル
方向ベクトル
直線のベクトル方程式
媒介変数t
2直線の交点
ベクトルの大きさ

自習課題

自習課題 —ベクトルを使って考えよう。—

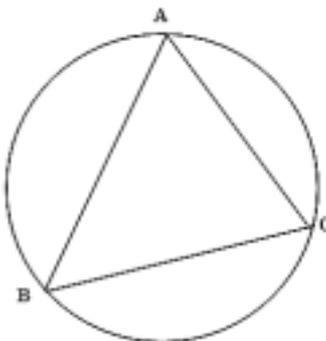
[問1] 「直径の上立つ円周角は全て直角である。」ことを、ベクトルを使って証明しよう。



基礎基本の定着確認

位置ベクトル
ベクトルの演算
内積
垂直条件
ベクトルの大きさ

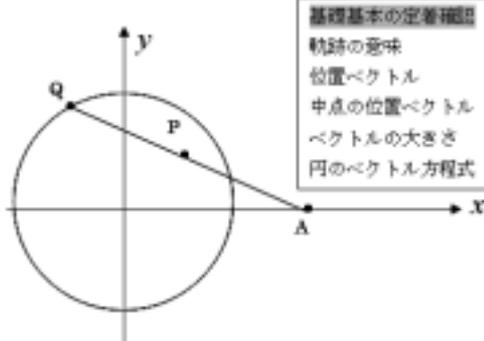
[問3] $\triangle ABC$ の外心をO、重心をG、垂心をHとする。
3点O、G、Hは、この順に一直線上にあり、 $OG:GH=1:2$
であることを示しなさい。ただし、 $\triangle ABC$ は正三角形ではないとする。



基礎基本の定着確認

外心・重心・垂心の定義
位置ベクトル
重心の位置ベクトル
3点が一直線上にある条件
ベクトルの垂直条件

[問2] 点A(6,0)と円 $x^2+y^2=16$ 上の点Qを結ぶ線分AQの中点をPとする。
Qがこの円上を動くとき、点Pの軌跡を求めよう。【数学Ⅱ教科書p.応用例題6】



基礎基本の定着確認

軌跡の意味
位置ベクトル
中点の位置ベクトル
ベクトルの大きさ
円のベクトル方程式

事例5 外国語（標準英語）

- 1 学年・科目名 卒業年次・標準英語（学校設定科目）
- 2 単元名（使用教科書名） UNIT 7 分詞（transfer 英語総合問題演習
コースC new edition：桐原書店）

3 単元の目標

- ・ペアワークなどを通して、キーセンテンスの音読や暗唱に積極的に取り組む。
- ・分詞などの文法事項を活用したり内容に応じた適切な表現等を選んだりして、英文を書くことができる。
- ・キーセンテンスを正しく音読したり暗唱したりできる。
- ・話の内容の展開を追って正しく読み取ることができる。
- ・動物園で起こった出来事の様子を表す語句の意味と用法を理解する。

4 単元について

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）

- ・目的語に不定詞を取る動詞、動名詞を取る動詞 中・高
- ・動名詞と現在分詞の違い 中
- ・分詞の形容詞的用法 中

中 は中学校既習事項、高 は高等学校既習事項

本単元における基礎・基本

- ・分詞構文、see 知覚動詞 + 目的語 + 現在分詞、付帯状況を表す with +(代)名詞 + 分詞の働き及び意味を理解すること。
- ・分詞を活用し、様々な英文を正確に読むことができること。

(1) 単元観

本単元は、上記の既習事項の理解・定着を図りながら、長文読解、分詞の学習に関わる文法事項の学習、学習した内容を使い英作文も行えるようになっている。さらに、単語・熟語の学習やリスニングなど、総合的に学習できる単元である。

(2) 生徒観

大学進学希望者が増えているが、進路希望は多様であり生徒の授業に対する取組状況には差がある。「H21 学習状況調査」でも、「英語の勉強が好きかどうか」については、「好き」と答えた生徒の割合は4分の1程度で、半分近くの生徒は「好きではない」と答えている。「授業がわかるかどうか」という質問に対しても、「わからない」と答える生徒が半数近くいる。このような状況で、生徒は自らの進路希望等に合わせて授業を選択しているが、授業の理解度に差が生ずる場合があり、また家庭学習の時間にも大きな差がある。大学受験を控えた時期になってようやく中学校の英語が分からないということに気付いて、復習から勉強を始める生徒が多数いるというのが現状である。基礎学力定着のためのドリルを行

っても、取組状況、理解度に差が出てしまい、定着度は低い傾向にある。

(3) 指導観

本科目は、大学受験希望者対象の講座で、一つの UNIT は長文・文法・整序作文・語句・リスニングから構成されており、受験を意識した進め方をしている。生徒間で授業の理解度に差が見られる現状を踏まえ、家庭学習で復習をすることに重点を置き、その成果を反映させて意欲を喚起することに努めたい。「生徒による授業評価」の「授業に興味・関心を持って取り組むことができた」という設問に対し、ほとんどの生徒が「当てはまる」と回答している。学習意欲は「分かる」ということが前提になることが多い。基礎・基本を定着させ、「分かる」ことを実感できるよう、単元ごとに復習ドリルを重ねていきたい。

5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	英文の音読や暗唱に積極的に取り組んでいる。
表現の能力	学習した事項を用いて正しく書くことができる。 正しいリズムやイントネーションで英文の音読ができる。
理解の能力	分詞を用いた英文の内容を正しく理解することができる。
知識・理解	「読むこと」や「書くこと」に用いられる語句や文法を理解している。

既習事項の定着度を把握するために、レディネステストを行いました。テストと文法事項のまとめを一緒にし、授業中にいつでも振り返ることができるように工夫しました。詳しくは、p.64 をご覧ください。



— UNIT 7 の学習の前に確認しよう！ (分詞) —

1. “～ing” — [] 「～している」 → ①be 動詞とともに、[] を作る。
②形容詞と同じ働きをする。
— [] 「～すること」 → ①名詞と同じ働きをする。

2. 分詞には [] 分詞 [～している] と [] 分詞 [～される] がある。

3. 形容詞的用法・・・現在分詞、過去分詞が名詞を修飾する。

① 上置きの分詞+名詞・・・名詞を前から修飾する — 現在分詞「～している・・・」
過去分詞「～される(されている)・・・」

(a) He smiled when he saw the sleeping baby.

和訳

(b) The boy was playing with a broken toy.

和訳

6 指導と評価の計画（太枠が本時）

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《評価方法》
R	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校と高等学校における既習文法項目の定着度を図る確認テストに取り組む。 	<p>本単元を理解するのに必要となる既習事項のレディネステストを実施し、生徒・教員双方が基礎・基本の定着度を把握する。</p>	<p>【R 4】 p.14 小テスト</p>
1 90分	<ul style="list-style-type: none"> ・長文読解の際に必要な、文法問題や語彙問題に取り組む。 <p>【D 4】 p.16 机間指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法・語彙問題の解答・解説を聞き、理解を深める。 ・重要表現や語彙を音読する。 ・ペアでキーセンテンスを暗唱する。 	<p>生徒が問題に取り組んでいる時間に、レディネステストにより把握した各生徒の「つまずき」に応じて生徒の個別指導に当たる。</p> <p>レディネステストの結果と個別指導の状況を基にして、文法事項・語彙の解説を行う。</p>	<p>（知識・理解） 《問題演習》</p> <p>（関心・意欲・態度）《活動の観察》</p> <p>（表現の能力） 《ペアごとにチェック》</p>
2 90分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の確認テストに取り組む。 <p>詳しくは、「8 本時の展開」（p.60）で説明します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長文読解問題に取り組む。 ・問題の解答・解説を聞き、理解を深める。 ・学習した表現や語彙を使って、グループで英作文をする。 ・リスニング問題に取り組む。 ・本単元の確認テストに取り組む。 	<p>復習として、前時の学習課題を宿題として生徒に与えておく。</p> <p>前時の基礎・基本事項を理解しているかどうか、把握する。</p> <p>【C 4】 p.17 確認テスト</p> <p>基礎・基本の文法事項を長文の中から探し、チェックさせる。</p> <p>【D 7】 p.16 基礎・基本に意識を向けさせる活動</p> <p>【D 2】 p.15 授業形態</p> <p>【C 4】 p.17 確認テスト</p> <p>総括テストを行うことにより、基礎・基本の定着度やこの単元のねらいの達成度を確認する。</p>	<p>【C 3】 p.17 家庭学習プリント</p> <p>（表現の能力） 《ワークシートチェック》</p> <p>（理解の能力） 《ペーパーテスト》</p>

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【表現の能力】

学習活動における具体の評価規準	学習した事項を用いて正しく書くことができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	常に文法的に正しい表現や語句を用い、自分の考えを英文で書くことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	ワークシートなどの解説を用いてヒントを与えたり、単語などの書く材料を与えたりする。

【理解の能力】

学習活動における具体の評価規準	分詞を用いた英文の内容を正しく理解することができる。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	常に分詞の用法を正しく把握し、英文の内容を的確に理解することができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	確認テストやワークシートの復習をしながら、分詞の理解を助ける補足説明をするなどの個別指導を行う。

8 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・本単元で学習した文法事項を用いて、自分の考えを表現する。
- ・長文の中に出てくる文法事項〔分詞〕を正しく認識し、内容を理解する。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準（観点） 《 評価方法 》
導入 15分	<p>・前時の文法学習事項についての確認テストに取り組む。</p> 	<p>確認テストの結果を踏まえ、家庭学習の必要性を再確認させる。</p>	<p>前時の文法事項に関する家庭学習課題についての問題を形成テストとして取り組ませ、前時の基礎・基本事項を理解しているかどうか、把握する。</p> <p>テスト中に机間指導し、つまづいている部分について助言を与え、個々の生徒に応じた基礎・基本の定着を図る。</p>	<p>【C3・4】 p.17 家庭学習プリント・確認テスト</p> <p>【D4】 p.16 机間指導</p>

展開 65 分	<p>・長文を読みながら分詞に下線を引く。</p>	<p>前時や本時の導入で学習した分詞の内容を生徒に意識・確認させながら課題に取り組ませる。</p>	<p>英文の中で、学習した文法事項に気付かせ、読解の活動を通して正確に意味や用法を理解させるとともに、基礎・基本の定着を図る。</p>

Thomas liked watching all the animals, but he especially loved the gorillas. The Johns went straight to the gorilla exhibit. There were six adult gorillas and a three-month-old baby gorilla. In the Brooklyn Zoo, the animals are not in cages. They are in large areas dug out of the ground. These areas have fences around them so the animals cannot get out.

Watching the gorillas, Sally started to cry. Kevin took her from Janet, and Janet looked in her bag for a bottle of juice. In those few seconds, Thomas got lost.

A woman saw Thomas climbing up the fence and shouted, "Stop him!" A tall man reached up to get him, but it was too late. Thomas fell down the other side of the fence. He fell 18 feet onto the hard concrete floor. He lay still with his head bleeding.

【桐原書店 transfer 英語総合問題演習コースC new edition UNIT 7 分詞 p.28 より抜粋。一部改編。】

生徒に単元の基礎・基本（この単元では分詞）に気付かせ、意識を向けさせます。それから英文を読ませる活動をすることで、正確な内容理解を図るとともに、基礎・基本の定着を促します。



	<ul style="list-style-type: none"> ・ 下線を引いた分詞の働きを確認する。 ・ 本文の内容に関する True or False Questions に答える。 ・ 学習した表現や語彙を使って、グループで英作文をする。 ・ リスニング問題に取り組む。 ・ ペアでキーセンテンスを音読し、暗唱する。 	<p>下線を引いた分詞を形容詞的用法や分詞構文などの用法に分けて板書し、知識の整理を図る。</p> <p>本文のポイントを解説し、間違えて理解していた箇所を確認させる。</p> <p>分詞などの学習事項を使い、生徒自身のことについて英語で表現させる。</p> <p>聞き取りのポイントを指示してから、解答させる。</p> <p>発音やイントネーションなどに注意して音読をさせる。</p>	<div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">【D 2】 p.15 授業形態</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">【C 1】 p.17 発表</div> </div> <p>本単元の基礎・基本として取り上げた分詞を使い、グループで知識を整理しながら学び合いを通して学校生活等に関する英文を作成させる。それをグループごとに発表させる。表現力を育成するとともに、基礎・基本の定着度を見取る。</p> <div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 【D 2】 p.15 授業形態 【D 6】 p.16 声に出させる活動 </div> <p>相手の顔を見て英語を言うように心掛け、できるだけ実際の会話に近い状況で練習をする。</p>	<p>(表現の能力)《ワークシートチェック》</p>
<p>まとめ 10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 確認テストに取り組む。 	<p>この単元に入る前に行ったテストを再度行うことで、理解度・定着度を深める。</p>	<p>レディネステストの問題形式を変えたものを総括テストで使用することで、基礎・基本の定着度を検証する。分詞の学習について、理解度を確認するアンケートを行い、定着度を検証する。</p> <div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 【C 2・4】 p.17 アンケート・確認テスト </div>	<p>(理解の能力)《ペーパーテスト》</p>

成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本 (既習事項)	成果	レディネステスト用のプリントとして、文法のまとめと練習問題を載せたものを作成した。テスト結果から、まず生徒一人ひとりが既習事項の基礎・基本のつまずきを把握できた。そして、授業中に既習事項について理解していないことが分かると、参考となる部分をプリントから積極的に探し、自力で解決しようという姿勢が見られるようになった。このような過程を通して、基礎・基本の定着度が増した。
	課題	既習事項の基礎・基本の定着に関して生徒間で差があったため、プリントや少人数授業の良さをいかした机間指導等を通して基礎・基本の定着を図った。しかし、個々の生徒の状況に応じた指導が不十分であった。より一層の手立てを工夫する必要性を感じた。
本単元における基礎・基本	成果	分詞は生徒にとって理解するのが難しい文法項目の一つであるが、レディネステスト・形成テスト・総括テストを単元の中で段階的に行うとともに、テスト問題の出題形式を変えることで様々な視点から定着度を把握した。そしてその結果を基に手立ての工夫をした。具体的には、学習した文法のポイントに長文の中で意識的に気付かせる活動、机間指導での個別の指導などを行った。このような工夫を通して、理解するのが難しい内容であったにもかかわらず、個々の生徒の状況に応じた基礎・基本の定着を図ることができた。
	課題	テストの際に、扱う英文は変わっていないが問題の出題形式を変えただけで答えられない生徒が予想以上に多かった。文法事項が単なる知識にとどまり、それを様々な場面で活用できる段階にまで達していない生徒が少なからずいた。基礎・基本の活用を通してその定着を図るとともに、自習課題等の工夫をしていくことが課題として挙げられる。
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		基礎・基本の定着度は生徒一人ひとりで違っている。個に応じたきめ細やかな指導を考えていく際に、授業中の手立てのみでなく、今後は家庭学習の促進や学習習慣の確立を目指して基礎・基本の定着を図る手立てを考えていきたい。また、単元を通して言語活動の充実を図るアプローチが足りなかったため、今後一層の充実を図る工夫が改善点として挙げられる。

レディネステスト

○学習目標を達成するために必要な基礎・基本の定着度を把握する手立て

★レディネステスト(単元の最初に実施)

—UNIT 7 の学習の前に確認しよう！〈分詞〉—

1. “～ing” — [] 「～している」 → ①be 動詞とともに、[] を作る。
 ②形容詞と同じ働きをする。
 — [] 「～すること」 → ①名詞と同じ働きをする。
2. 分詞には()分詞 [～している] と()分詞 [～される] がある。
3. 形容詞的用法・・・現在分詞、過去分詞が名詞を修飾する。
- ① 1語の分詞+名詞・・・名詞を前から修飾する — 現在分詞「～している・・・」
 過去分詞「～される(されている)・・・」
- (a) He smiled when he saw the sleeping baby.
 和訳 _____
- (b) The boy was playing with a broken toy.
 和訳 _____
- ②名詞+分詞句・・・名詞を後ろから修飾する。 現在分詞「～している・・・」
 過去分詞「～される(されている)・・・」
- (a) The boy drinking water is my brother.
 和訳 _____
- (b) This is the comic read by a lot of high school students.
 和訳 _____
4. 分詞構文・・・主となる文を修飾して副詞的な働きをする。
- (a) Tom was cooking in the kitchen, listening to music. 【同時】「～しながら」
 和訳 _____
- (b) Taking a key out of her bag, she opened the door. 【連続】「～して(そして・・・)」
 和訳 _____
- (c) Looking up, I saw a lot of stars in the sky. 【時】「～するときに」
 和訳 _____
- (d) Written in simple English, the book is easy to read. 【理由】「～なので」
 和訳 _____

事例6 外国語（英語）

- 1 学年・科目名 2 学年・英語
- 2 単元名（使用教科書名） Lesson 5 「Mars - The Only Way Out?」
（CROWN English Series :三省堂）

3 単元の目標

- ・音読、ペアワーク、グループワークなどの活動に積極的に取り組み、コミュニケーションを図る。
- ・教科書の文章を正しく音読したり、学習した文法事項（未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法「結果」）や重要表現を用いて正しく書いたり、話したりする。
- ・火星のテラフォーミング（惑星地球化計画）や地球の抱えている諸問題などについて書かれた英文を正しく聞き取り、読み取る。
- ・未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法「結果」を含む文構造を理解する。

4 単元について

本単元を理解するのに必要な基礎・基本（既習事項）

- ・現在進行形 中 ・過去進行形 中 ・現在完了形 中 ・過去完了形 高
- ・不定詞の副詞的用法「目的」 中・高、「感情の原因」 中
中 は中学校既習事項、高 は高等学校既習事項

本単元における基礎・基本

- ・未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法「結果」の働き及び意味を理解すること。
- ・学習した内容を活用して、多様な英文を正確に読んだり、コミュニケーション活動を通して自分の考えを表現したりできること。

(1) 単元観

本単元の学習事項を理解するためには、中学校・高等学校の既習事項の理解が不可欠な要素となっている。本単元の基礎・基本を活用し、火星のテラフォーミング（惑星地球化計画）や地球の抱えている諸問題などを理解し、考えるのに適した教材である。

(2) 生徒観

中学校段階での英語の学習事項の理解と定着はできている。高校での英語の基本的な学習事項の理解は比較的できているものの、その定着と活用が大きな課題である。「H21 学習状況調査」では、「英語の文構造を理解し、正しい語順で書く」ことをねらいとした出題の通過率が想定したよりも低かった。また、「英語の授業がどの程度わかりますか」という質問に対しては、「どちらかといえばわからないことが多い」と「ほとんどわからない」と回答した生徒の割合が 34.8%であった。これらの生徒に対して、学び直しを通して適切な指導を与えていくことも重要な課題である。

(3) 指導観

文法事項を指導する際に、単なる知識として生徒に理解させるだけではなく、活用させることを通して確実な定着を目指す。「生徒による授業評価」の集計結果によると、学習への取組みや学習への態度・姿勢が「あまり良くない」または「良くない」と答えた生徒が2年生でそれぞれ約10%いた。また、学習への姿勢や取組みが良好であると考えている生徒の中にも、今後の学習に不安を感じている生徒が意外に多いのが現状である。このような生徒が意欲的に学習に取り組める環境の確立を工夫したい。具体的には、視覚的効果を意識した学習教材を作成して授業で活用したり、家庭での学習習慣の確立をサポートできるような教材を作成したりする。また、効果的な“realia(レリア:実物教材)”の活用の一つとして、生徒が学習した文法事項や英単語・熟語などが実際に使われている英字新聞などを読ませていきたい。実際の英文が理解できるという実感を生徒の学習意欲の向上につなげていきたい。

5 単元の評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
関心・意欲・態度	音読、ペアワーク、グループワークなどの活動に積極的に取り組んでいる。授業者の質問等に対して英語で積極的に返答している。
表現の能力	正しいリズムやイントネーションで音読することができる。 学習した文法事項を用いて正しく書いたり話したりすることができる。
理解の能力	本単元の英文の内容を正しく聞き取り理解することができる。 語句や文法の知識を活用して英文の内容を正しく読み取ることができる。
知識・理解	本単元で学習した語句や文法事項の知識を正しく身に付けている。 火星探索や地球の諸問題について理解している。

6 指導と評価の計画(太枠が本時)

時間	主な学習活動	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準(観点) 《評価方法》
R	・中学校と高等学校での既習文法事項の理解定着度の確認テストを受ける。	新単元を理解するのに必要となる既習事項のレディネステストを実施し、生徒・教員双方が定着度を把握する。	
1	・単語集の単語やイディオムを覚え、発音練習をする。 ・地球と火星に関する背景的知識を身に付け、本単元の概要を理解する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 【R4】 p.14 小テスト </div>	(知識・理解) 《ワークシートチェック》

<p>2</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英字新聞の簡単な英文を読み質問に答える。 ・プレゼンテーションソフトとワークシートを活用して次の学習活動を行う。 既習文法事項の復習。 本単元で学習する文法事項の理解。 詳しくは、「8 本時の展開」(p.70) で説明します。 ・補助教材を活用し理解を深める。 ・小テストを受ける。 	<p>本単元における基礎・基本で取り上げる「未来進行形」を含む英文を扱い、生徒に基礎・基本に対して意識を向けさせる。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【D7】 p.16 基礎・基本に意識を向けさせる活動</p> </div> <p>レディネステストの結果を踏まえながら、既習文法事項と本単元で学習する文法事項を説明する。その際に適宜質問をしながら、生徒とのコミュニケーション活動を通して、基礎・基本の定着度を確認する。プレゼンテーションソフト、ワークシート、補助教材を使用して理解を深めさせる。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【D5】 p.16 教材・教具</p> </div> <p>最後に小テストを行い、本時で学習した内容の定着度を確認する。</p>	<p>(関心・意欲・態度)《活動の観察》</p> <p>(知識・理解)《小テスト》</p>
<p>3 6</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新出語(句)の意味・発音を確認する。 ・ペアワークで新出語(句)の定着を図る。 ・本文のCDを聞き内容を理解する。 ・教師のモデルリーディングを聞き、本文にスラッシュを入れる。 ・ワークシートに沿って、既習並びに新出の文法事項を学習し、本文の内容を理解し、日本語訳を確認する。 ・個人、ペアで音読練習を行う。 ・ワークシートの問題を解く。 	<p>文法事項その他重要なポイントを含むワークシートを用いて、基礎・基本の定着を図る。</p> <p>個人、ペアの音読活動を通して基礎・基本の定着を図る。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【D2】 p.15 授業形態</p> </div> <p>適宜質問をしながら、生徒とのコミュニケーション活動を通して、基礎・基本の定着度を確認する。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【C5】 p.17 発問</p> </div>	<p>(関心・意欲・態度)《活動の観察》</p> <p>(理解の能力)《ワークシートチェック》</p> <p>(理解の能力)《ワークシートチェック》</p> <p>(表現の能力)《ペアごとにチェック》</p>

<p>7</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ Exercises その他の教科書の関連問題で定着度を確認する。ペアワークで重要表現を暗記する。 ・ 最後に単元の文法事項や本文の内容に関する総括テストを受ける。 	<p>練習問題を通して、本単元の文法事項の基礎・基本の定着度を確認する。</p> <p>総括テストを行い、基礎・基本の定着度と単元目標の達成度を確認する。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【C4】 p.17 確認テスト</p> </div>	<p>(知識・理解) 《ペーパーテスト》</p>
<p>8</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループワークで協力し合いながら、本単元で学習した文法事項を用いて英文を作成し発表する。 ・ 振り返りシートで学習内容や取組みを振り返る。 <p>【家庭学習教材例】 (表計算ソフトで作成)</p>	<p>基礎・基本を言語活動を通して繰り返し学習した結果、確実に定着をしたか確認する。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【D2】 p.15 授業形態</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>【C1】 p.17 発表</p> </div> <p>振り返りシートの結果を受けて、次の単元に向けての改善点を把握する。</p> <div style="text-align: center;"> <p>【C2】 p.17 振り返りシート</p> </div> <p>家庭学習を促す関連教材を必要に応じて与える。(追加プリント、プレゼンテーションソフトや表計算ソフトで作成した教材)</p> <div style="text-align: center;"> <p>【C3】 p.17 家庭学習プリント・教材</p> </div>	<p>(表現の能力)《グループごとにチェック》</p>

7 評価規準に照らした生徒の学習状況（本時で評価する部分のみ）

【関心・意欲・態度】

学習活動における具体的評価規準	授業者の質問等に対して英語で積極的に返答している。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	授業者の質問等に常に積極的に答えようとしている。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	繰り返し質問したり、容易な表現を用いたりする。

【知識・理解】

学習活動における具体的評価規準	本単元で学習した語句や文法事項の知識を正しく身に付けている。
「十分満足できる」状況(A)と判断する具体的状況例	学習した文法事項を正しく理解しており、復習テストの問題を正確に解くことができる。
「努力を要する」状況(C)と評価した生徒への手立て	説明を繰り返したり、基本的な練習問題用のプリントに取り組みせたりして理解を定着させる。その上で、復習問題を再び解かせて理解していることを確認する。



単元で扱う基礎・基本に、生徒が意識を向けるようにするため、英字新聞を利用した教材です。

「未来進行形」を扱った記事【The Japan Times / September 30, 2010 より】

☆ ボツワナ共和国(アフリカ)は9月30日に今年国時独立記念日を迎えました。

Fortunately, President Khama will make his first official visit to Japan as head of state from Oct. 17 to 20. The visit affords us another opportunity to raise our profile in Japan, as well as to further deepen and enhance the cordial bilateral cooperation that subsists between Botswana and Japan.

During the visit we will also be holding an Investment Roundtable with the support of Keidanren, an exhibition that will highlight Botswana's natural wonders including her sparkling diamonds, her outstanding wildlife and tourist destinations.

During the visit we will also be holding an Investment Roundtable with the support of Keidanren...

★未来進行形★ → will be + ing
 ①未来のある時に進行中の動作を表します。「～しているのだる」
 ②未来のある時にすることになっている予定を表します。「～することになっている」

今日の授業で学習するポイントのメモ

日本語: その訪問中に私たちは
 経団連の()で()
 円卓会議を()。

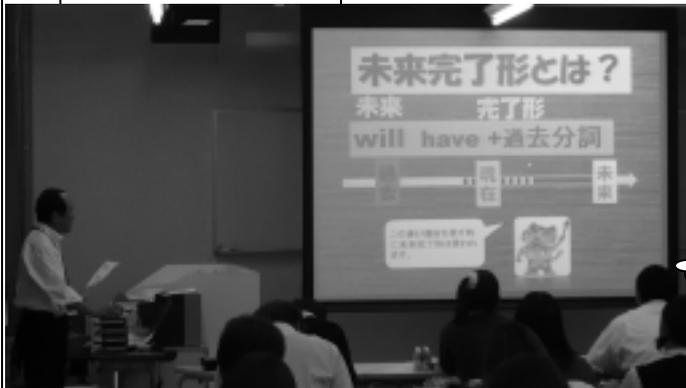
8 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・教員の質問等に対して英語で積極的に答える。
- ・既習文法事項と、本単元で学習する文法事項を理解する。

(2) 本時の指導過程と評価の計画

過程	学習活動	指導内容及び留意点	基礎・基本の定着を図るための視点	評価規準(観点) 《評価方法》
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・英字新聞の簡単な英文記事を、辞書を活用して内容把握する。 ・発音練習をする。 ・「未来進行形」を含む英文を日本語に直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○辞書を活用して単語の意味を調べさせる。 ○単語の意味を言わせ、発音練習をする。 ○記事に関連した地図と国旗を見せて記事への理解を促す。 ○留学生に英文を読んでもらい、ほかの生徒にリスニングの機会を与える。 	<p>本時で学習する「未来進行形」が含まれている英字新聞の記事を読ませることで、生徒に基礎・基本に対して意識を向けさせ、学習事柄への導入とする。</p> <div data-bbox="890 927 1225 1066" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【D7】 p.16 基礎・基本に意識を向けさせる活動</p> </div>	
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションソフトを利用して作成した教材を見ながら、教員の解説を聞き、ワークシート・練習問題に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○レディネステストの結果を踏まえながら、既習文法事項と本単元で学習する文法事項を説明する。 	<p>プレゼンテーションソフトによる視覚的効果を通して、基礎・基本の定着を確実なものにする。その際に適宜質問をしながら、生徒とのコミュニケーション活動を通して、基礎・基本の定着度を確認する。</p> <div data-bbox="890 1581 1225 1675" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【D5】 p.16 教材・教具</p> </div> <div data-bbox="890 1733 1225 1827" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>【C5】 p.17 発問</p> </div> <div data-bbox="906 1839 1337 2033" style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> <p>プレゼンテーションソフトを使用した授業の様子です。</p> </div>	

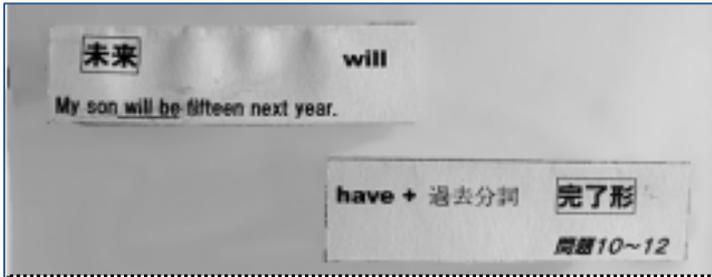


	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを使い、中学校と高等学校での既習文法事項の復習をする。 ・本単元で学習する文法事項を理解する。 ・練習問題に取り組む。 ・補助教具を活用して理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○適宜質問をしながら、生徒とのコミュニケーション活動を通して、基礎・基本の定着度を確認する。 ○理解が不十分な時は、繰り返し同じ画面を見せて理解させる。 ○生徒が練習問題を解いている時は、机間指導をしながらサポートする。 	<p>既習文法事項の復習を通して、本単元で学習する文法事項への橋渡しをする。</p> <p>プレゼンテーションソフトを利用した解説と問題演習をテンポ良く連動させて問題を解かせることで、基礎・基本の確実な定着を図る。本単元で学習する文法事項の問題を解くことにより基礎・基本の定着を図る。</p> <p>補助教具を使用して理解を深めさせる。</p> <p>詳しくは、p.73をご覧ください。</p>	<p>(関心・意欲・態度) 《活動の観察》</p>
<p>まとめ 10分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時で学習した内容の小テスト(定着度確認テスト)を受ける。 ・アンケートに回答する。 <p>本時の授業では触れなかった「現在・過去進行形」、詳解できなかった「現在・過去完了形」の解説など、英文法の「未来」表現の定着につながる既習文法事項に対する理解を促す内容になっています。 詳しくは、p.73をご覧ください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○学習した内容を確認しながら解答するよう指導する。 ○机間指導をしながら生徒の質問に答えると同時に、定着度をチェックする。 	<p>小テストを通して基礎・基本の定着度を確認する。</p> <p>【C4】 p.17 確認テスト</p> <p>表計算ソフトで作成した自宅学習用の教材を紹介する。</p> <p>【C3】 p.17 家庭学習教材</p>	<p>(知識・理解)《小テスト》</p>

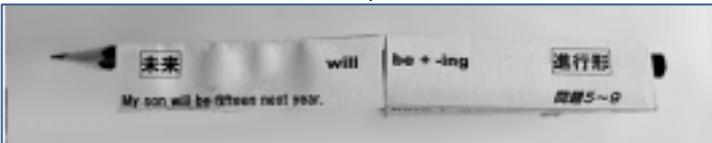
成果と課題、今後の改善点

本単元を理解するのに必要な基礎・基本 (既習事項)	成果	レディネステストの結果で既習事項の定着度が高いことが分かった。そこで、説明の時間を最小限にし、音読、ペアワーク、グループワークなどの言語活動を通して既習事項の確実な基礎・基本の定着を図った結果、本単元の文法事項の理解にスムーズにつながった。
	課題	既習事項の定着度を把握するための手立ての中に適切でないものがあった。正確に定着度を把握するための手立ての工夫が今後の課題である。また、既習事項によって定着度に差があったので、復習のために自宅学習ができる自作教材等を提示していきたい。
本単元における基礎・基本	成果	未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法「結果」を様々な学習形態を工夫しながら授業展開した結果、それらの定着の度合いが高まり、本単元全体の内容を的確に把握することができた。生徒が学習したことを単なる知識として理解するだけではなく、英字新聞を読んだり、学び合いのグループ活動を通して英語で書いたり会話をしたりという、知識を活用する学習活動を比較的多く授業中に設定できたのが良かった。また、プレゼンテーションソフトでの解説と問題演習とを連動させるという授業展開が効果的であった。生徒からは「ビジュアル効果をいかした説明が親しみやすく、難しそうな文法だったが、理解できて良かった。」という感想があった。プレゼンテーションソフトの視覚的効果を活用することによって、基礎・基本を定着させることができたものと考えられる。
	課題	本単元の基礎・基本である文法事項の定着が不十分な生徒がいた。その原因としては、中学校及び高等学校入学後に学習した文法事項が十分に理解できていなかったために、それらの発展として新しく学習する文法事項の理解につながらなかったことが挙げられる。 また、学習した事項の単なる暗記ではなく、活用を通して基礎・基本の定着を促す授業を考えていく必要がある。本単元でもその点を意識して授業を進めたが、更に工夫をする必要がある。
基礎・基本の定着に向けた今後の改善点		生徒からは、「先生が机間指導をしながらサポートしてくれたので質問もでき、安心して取り組めた。」という意見があった。生徒間にある定着度の差を埋めるために、個人指導並びに復習のための家庭学習ができる教材等を一層工夫したい。また、基礎・基本を暗記してそれを単に再現するのではなく、自己表現をしたり教科書以外の英文を読みこなせることができるようにしたりするような、言語活動の充実を通じた基礎・基本の定着を促すための工夫を一層進めていきたい。

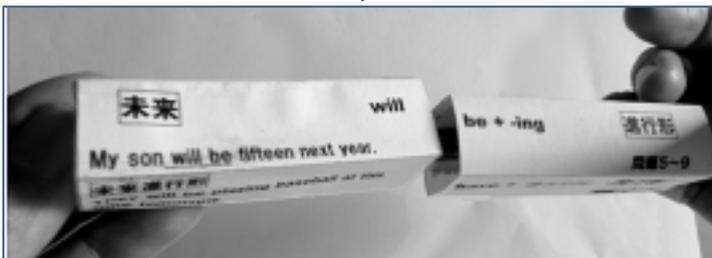
自作の補助教具



未来に関する文構造を書いた教具



筆記用具に通す



回転させて様々な文構造を学習する

本単元で学習する未来を含んだ様々な文構造を理解する上で、いろいろな組合せを生徒自身が考えることで、基礎・基本の定着を図ることができます。

表計算ソフトで作成した自宅学習用の教材（正解すると が表示されます）

★問題あ★ 表紙

★次の英文の（ ）内に入る適当な英語を選び、右の囲みに数字を入れなさい。

1 My son will () fifteen next year. 「私の息子は来年15歳になります。」	数字↓ 1 <input type="text" value="2"/> ○	
2 He will () smoking. 「彼はタバコをやめようつもりです。」	2 <input type="text" value="7"/> ○	
3 They will () baseball at this time tomorrow. 「明日の今ごろは、彼らは野球をしているでしょう。」	3 <input type="text"/>	
4 She will () her friend at the airport next week. 「来週、彼女は彼女の友人を空港に送迎に行かれています。」	4 <input type="text"/>	
5 I will () my homework by tomorrow. 「私は明日までには宿題を終えているでしょう。」	5 <input type="text"/>	
6 My mother will () in the hospital for ten days tomorrow. 「明日で私の母が入院して10日になる。」	6 <input type="text"/>	
7 Next year my father will () at the company for forty years. 「来年で、私の父はこの会社で40年間勤め続けることになる。」	7 <input type="text"/>	

[1 be meeting 2 be 3 have been 4 be playing 5 have been working 6 have finished 7 stop]

第5章 基礎・基本のより確実な定着に向けて

本研究では、各種学力調査の結果を基に、基礎・基本のより確実な定着を目指しました。

本研究の特徴は、義務教育段階及び高校入学後の既習事項を踏まえ、単元を中心とするR - P D C Aサイクルを基に「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」を作成し、それに沿った授業づくりを考えたことです。また、基礎・基本の定着のために様々な手立てを講じて授業実践を行い、アンケートやワークシートの分析等を通して成果や課題を見いだすようにしました。

これらの結果を踏まえ、基礎・基本をより確実に定着させていくための今後の方向性についてまとめます。

1 それぞれの実践から見えてきた成果と課題

(1) 基礎・基本の定着度を把握する手立て（Research）について

単元を理解するのに必要な基礎・基本の定着状況を事前に把握し、教員と生徒の双方がつまづきを共有します。教員は生徒のつまづきを単元の授業計画に反映することと、生徒は自身のつまづきを意識して授業に臨むことで、基礎・基本の定着を図ることをねらいとして実践に取り組みました。

様々な手立てを用いて定着度を把握し、その結果を授業づくりに反映させ実践した成果をまとめると次のようになります。

a レディネステストを実施した結果、既習事項は予想よりもはるかに定着度が高かった。

a' 既習事項の説明を最小限にとどめることにより、新単元の学習事項に時間を掛けることができた。その結果、効率的に授業を進めることができ、新単元の基礎・基本の定着と単元の目標を達成することができた。

b 単元の導入などに定義などの抽象的な意味を言葉で説明させてみたが、予想に反してほとんどの生徒が自分の言葉で表現できなかった。

b 時間を掛けて基礎・基本事項の概念を繰り返し説明した。また、教員と生徒の双方がつまずきについて共通認識を持ってその後の授業に臨んだことで、授業内容を理解しようとする生徒の学習意欲が向上し、基礎・基本の定着にもつながった。

c 音読を通して基本的な語彙の読みを確認したり、質問をして理解度や定着度を確認したりしたが、生徒間でかなりの差があった。

c 問題演習の時間などに机間指導による個別対応を行うことで、個々の生徒のつまずいている箇所の解消に努めることができた。それにより、個に応じた基礎・基本の定着を図ることができた。

a に関連して新たに分かったことがありました。事例6（外国語）の実践では、事前のレディネステストで既習事項の基礎・基本の定着度において非常に高い結果が出ていました。しかし、単元の途中でコミュニケーション活動を通して定着度を再確認したところ、テスト結果で見たほどには定着していないことが分かりました。原因を分析した結果、レディネステストの問題に、既習事項を理解していなくても解答できるものがありました。つまり、定着度を把握する手段が適切ではなかったことが分かりました。

b については、教員と生徒の双方がつまずきを共有することがとても大切であるという典型的な例です。教員は生徒が、「これくらいは分かっているし、説明もできるだろう。」と思い込んでいました。生徒は自分が、「このくらいは分かっているし、説明もできる。」と漠然と考えていました。

双方がつまずきについて共通認識を図ることが、その後の授業が効果的に行われることにつながりました。

c については、単元に入る段階で、生徒の基礎・基本の定着度に大きな差があることが判明したケースです。基礎・基本の定着度の把握を行った結果を踏まえ、個別に指導を行うなどの工夫を講じたことにより、生徒間の定着度の差を縮小することができました。

基礎・基本の定着度を把握する手立て(Research)について、成果と課題は次のようにまとめられます。(: 成果、 : 課題)

既習の基礎・基本の定着度を把握するには、教員の経験則に基づくのではなく、テストや発問などの手立てを用いて教員と生徒の双方が正確に定着度を把握し、単元指導計画の作成にいかすことが重要であることが改めて確認できた。

実践の中で正確に定着度を把握できていないケースがあった。定着度を正しく把握するためには、どのような点に注意してテストを作成したり発問したりすればよいかなどをまとめ、それを基に手立てを工夫することが必要である。

(2) 基礎・基本の定着を図る手立て(Do)について

(1)で把握した生徒の基礎・基本の定着状況を踏まえて単元指導計画を作成し、生徒の実態に応じて適切な手立てを講じることで、基礎・基本のより確実な定着を図ることをねらいとして実践に取り組みました。

様々な手立てを用いて、基礎・基本の定着を目指した授業を実践した成果をまとめると次のようになります。

a ペアワーク、グループワークといった授業形態を取ることにより、自分の考えを自分の言葉で他者に説明する機会を設けた。

a' 学習内容を十分に理解、咀嚼そしゃくしなければ他者に伝えることができないことに気が付いた結果、生徒の学習に対する意欲が高まるとともに、単元における基礎・基本の定着に効果が見られた。

b 教科における基礎的・基本的な用語の定義や概念などを、「マイメモシート」と名付けたワークシートに整理させた。

b' 生徒に基礎的・基本的事項の必要性・重要性を再認識させることで、基礎・基本の定着につなげることができた。また、授業中に活用した「マイメモシート」の効果で、自分の考えを文章にまとめることができ、自ら問題を解決しようとする意欲が高まった。

c 自作の教具や板書の工夫、ICTの活用などにより、生徒の基礎・基本の理解を促進する手立てを講じた。

c 視覚的で動きのある教材・教具を用いて説明を行うことで、生徒の興味・関心が喚起され、授業内容を理解しようとする意欲の高まりが見られた。また、その意欲の高まりが基礎・基本の定着につながった。

a、bの結果に関連して、他者に自分の考えを説明する、自分の言葉で文章を書く、といった学習活動が、基礎・基本の定着に非常に有効であることが分かりました。

このことから、基礎・基本を定着させるためには、ドリルや書き取りの練習といった学習だけではなく、説明や記述といった知識・技能を活用する学習活動をも含んだ多岐に渡る学習指導が有効であるということが分かります。

ただ、ペアワークやグループワークといった活動について、積極的に取り組むことができない生徒に対しては、活動の初期の段階ではその生徒が発言しやすいグループに入れるなど、授業に参加させるための手立てが必要です。また、グループワークについては、発言する生徒に偏りがあったり、一部の生徒の発言や発言の仕方などによって他の生徒が発言を控えてしまうこともあったので、相互評価を取り入れるなど、聞く態度の育成などの指導が必要であると考えられます。

cの結果に関連して、生徒は初めのうちは自作の教具やICT教材などに興味を持つものの、そのうち慣れや飽きが生じてきます。ですから、教員は教具やICT教材などの改善に取り組むとともに、教具やICT教材は授業を生徒によく理解させるための手段であるということを十分に自覚し、授業のねらいを常に見失わないでいることが重要です。また、教具やICT教材を作成するときに、それらが主役とならないように留意することが必要です。

事例4（数学）では、公式などの既習事項を画用紙に書いた「ポイントカード」を黒板に貼って授業を行いました。

今回は、既習事項を体系的に理解させ、基礎・基本の定着を図るために、「ポイントカード」を黒板に並べて知識の整理を図りましたが、生徒によっては「ポイントカード」の羅列としか捉えられず、理解の不十分な状況も見受けられたので、更なる改良が必要だと感じられました。

基礎・基本の定着を図る手立て(Do)について、成果と課題は次のようにまとめられます。(: 成果、 : 課題)

基礎・基本の定着を図る手立てに関しては、ドリルや書き取り練習・音読・暗唱などの繰り返しの学習活動だけでなく、教材・教具の工夫や板書の工夫、授業形態の工夫、要約・説明・論述・発表といった言語活動の充実を図る取組みなどの多岐にわたる手立てが有効であることが確認できた。

また、多岐にわたる基礎・基本の定着を図る手立てを講じることが、生徒の興味・関心を喚起し、学習意欲を高めることに大いに影響していること、そして、学習に意欲的に取り組むことで一層基礎・基本の定着が図られ、新たな意欲を生んでいくことが実践を通して明らかになった。

多岐にわたる基礎・基本の定着を図る手立ては、生徒の興味・関心を喚起する効果はあるが、時間の経過とともに飽きや慣れが生じるという状況も報告された。また、クラス全体に対する手立ての工夫だけでなく、個々の生徒の定着状況に応じた手立ての工夫には改善の余地があることも明らかになった。

(3) 基礎・基本の定着度を検証する手立て (Check) について

授業実践を踏まえ、生徒の実態に応じて適切な手立てを講じること、基礎・基本の定着度を検証する実践に取り組みました。

様々な手立てを用いて、基礎・基本の定着度の検証を実践した成果をまとめると次のようになります。

a 出題形式や難易度を変えながら、形成テスト・総括テストを単元の途中や最後に行うことで、基礎・基本の定着度を検証した。

a 単元の途中で複数回のテストを行うことで、生徒の基礎・基本の定着の状況を正確に確かめることができた。また、個々の生徒の定着状況を知ることができるため、その結果を個別指導にいかすことができた。

b 共通の質問事項を意図的に配したアンケートを単元の前後に実施することにより、基礎・基本の定着度を検証した。

b 事前と事後のアンケートを比較・分析することにより、基礎・基本の定着状況の変容を確かめることができた。また、自由記述欄を設けて振り返りをさせたことで、生徒の自己理解を促すことができた。

c 思考力・判断力・表現力等を育成するための学習活動である論述や発表などを通して、基礎・基本の定着度を検証した。

c ワークシートの記述や発表の内容などを分析することにより、基礎・基本の定着の状況を確認することができた。また、個々の生徒の状況を知ることができるため、その結果を個別指導にいかすことができた。

aの結果に関連して、単元の途中で、基礎・基本の定着状況を確認しながら授業を進めていくことが大切であることが分かります。定着の状況が思わしくなければ、個別に、あるいは全体に、適切な対応を取ることができます。また、その後の単元の授業展開を組み立て直すことも可能となります。

テスト作成には手間は掛かりますが、一度作成したものを、出題形式を変えるなどの工夫をしていけば、定着度を多角的に検証することができます。

基礎・基本の定着を確認するための発問をこまめに行ったり、机間指導でノートやワークシートを点検したり、生徒の表情や応答を丁寧に見取ったりすることも有効です。

bの結果に関連して、アンケートに自由記述欄を設けることで生徒に振り返りをさせました。それにより、生徒は自分の学習状況について客観的に認識することができました。また、教員も生徒の記述から自分の授業を振り返るとともに、授業改善につながるヒントを得ることができました。

cの結果に関連して、これは事例2（国語）の実践ですが、教科書に書かれた主人公の心情の変化を読み取り、教科書には書かれていない主人公のその後の言動を想像して書く、という課題を与えました。

この実践では、学習プリントによる本文中の語彙の確認から始まり、単元の

途中でも、主人公の心情の読み取りに関し、ペアワークやグループワーク、ワークシート等を通して丁寧な指導を積み重ねてきました。それらの指導を通して、ふだんはなかなか自分の考えを文章にできなかった生徒も、教科書に書かれた主人公の心情の変化を踏まえて、最終的に自分の言葉で、主人公のその後の言動を想像して書くことができました。その記述を分析した結果、登場人物の設定を的確に読み取るという、本單元における基礎・基本の定着を確認することができました。

基礎・基本の定着度を検証する手立て(Check)について、成果と課題は次のようにまとめられます。(: 成果、 : 課題)

定着度の検証は単元の終わりに行うだけでなく、単元の途中でも実施することが、個々の生徒の定着度を正確に知る上で重要であり、その後の授業展開を再構成するために必要であることが分かった。

基礎・基本の定着度の検証の手立てに関しては、振り返りシートやアンケートに選択肢で答えさせるのではなく、自分の言葉で記述させることで、生徒の自己理解を促すことができた。また、教員も生徒の記述から、個々の定着度を検証できるとともに、授業改善につながるヒントを得ることができた。

思考力・判断力・表現力等を育むことにつながる要約・説明・論述・発表などの学習活動を通して、基礎・基本の定着をより確実に検証することができた。

基礎・基本の定着度の検証においては、その検証結果を今後の学習に向けて、どのように改善の手立てに反映させていくかが課題である。

2 結び ～基礎・基本のより確実な定着のために～

最後に、基礎・基本のより確実な定着のために大切であると考えられることを次の3点に整理します。

単元の一部だけでなく単元の全体を通じて指導を行う。
学んだことを実生活と結び付け、実生活の中で活用させる。
宿題や予習・復習などの家庭学習の充実を図り、学習習慣を確立させる。

基礎・基本の定着を図る指導は単元の一部だけでなく単元の全体を通じて行われることが大切です。そのときに、基礎・基本の定着を図るための視点を取り入れた単元指導計画に基づき、単元の中で多岐にわたる学習の手立てを講じたり、言語活動をより充実させるための取組みを行ったりすることが有効です。また、基礎・基本を定着させるための指導と、思考力・判断力・表現力等を育成する指導、学習意欲を高める指導を別々のものと捉えるのではなく、総合的なものとして捉えることも必要です。

本研究における実践を通して、思考力・判断力・表現力等を育むことにつながる要約・説明・論述・発表などの学習活動が、基礎・基本の定着にも有効であることが分かりました。また、基礎・基本が定着することが学習意欲にも良い影響を及ぼし、生徒がその後の学習に、より意欲的に取り組むようになることで、基礎・基本のより確実な定着が図られることが確認できました。つまり、「H20 答申」における「確かな学力」の三つの学力の重要な要素を調和的に定着・育成することの重要性が、この研究を通して再確認できたといえます。

また、第3章で述べたように、基礎・基本が定着しない理由の一つに、「一度学習した内容をほかの単元やほかの教科等で再び取り上げる場面が少ない。」ということがあります。本研究で扱うことはできませんでしたが、学習したことをほかの単元やほかの教科等で再び取り上げる場面を設けるなど、教科横断的な視点も取り入れた指導の工夫についても研究が求められます。例えば、問題の解決や探究活動に取り組む総合的な学習の時間を、基礎・基本の習得とその活用を通してのより確実な定着、という視点を取り入れて構想することなどが考えられます。

今回の研究では検証までには至りませんでした。今後の取組みとして大切であると考えられることを次に述べます。

まず、学んだことを実生活と結び付けて、より確実な定着を目指すための工夫です。

平成20年1月に文部科学省より出された「平成19年度 全国学力・学習状況調査 【中学校】報告書」を見ると、数学の指導として、計算問題などの反復練習をする授業を行った学校の割合は約93%ですが、実生活における事象との関連を図った授業を「行った」学校の割合は約49%であり、「よく行った」学校の割合は、6.6%に過ぎません。

基礎・基本のより確実な定着のために、学んだことを実生活と結び付け、実生活の中で活用させる指導の工夫が求められます。それによって、学んだことが単なる教室の中の知識ではなく、生活にいきる知恵であることを伝えていくことが必要です。

次に、家庭学習の充実を図ることです。授業において基礎・基本の定着を図るのはもちろんのこと、定着状況に応じた個別の指導を考えると、宿題や予習・復習などの家庭学習を視野に入れた、学習習慣を確立させるための指導方法を一層充実させていくことが必要です。

生徒の確かな学力を育むために、教員一人ひとりが、基礎・基本のより確実な定着という視点から自分の授業を見直し、思考力・判断力・表現力等を育むための言語活動の充実を図りながら授業改善を進めていくことが求められています。

引用文献・参考文献

〔引用文献〕

- 神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」p.14、p.62
- 神奈川県教育委員会 2009 「神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」p.8、p.9、p.10、p.11、p.54、p.55
- 中央教育審議会 2006 「審議経過報告」p.51
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」p.7、p.12、p.14、p.24、p.40、p.141
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 総則編』東山書房 p.10、p.53、p.62

〔参考文献〕

- 神奈川県教育委員会 2010 「平成 21 年度公立高等学校等卒業者の進路の状況」http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/40/4020/chosa/ks/21ks_kekka/ks_kekka_digest.pdf（URL は 2011 年 1 月取得）
- 神奈川県立総合教育センター 2009 「＜高等学校＞学習意欲を高める数学・理科学習指導事例集～生徒の学ぶ意欲をはぐくむヒント～」
- 神奈川県立総合教育センター 2010 「＜中学校・高等学校＞数学・理科授業づくりガイドブック～思考力・判断力・表現力の育成に向けて～」
- 教育開発研究所 2009 『教育の最新事情がよくわかる本』教育開発研究所
- 京都市総合教育センター カリキュラム開発支援センター 2007 「学びのつながりからみる小中連携～算数・数学科の留意点系統図作成を通して～」http://www.educity.kyoto.jp/sogokyoiku/curri_c/fromkyoto/11_ikkan/index.html（URL は 2010 年 12 月取得）
- 国立教育政策研究所 2007 「平成 19 年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント」http://www.nier.go.jp/tyousakekka/tyousakekka_point.pdf（URL は 2010 年 12 月取得）
- 国立教育政策研究所 2010 「平成 22 年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント」http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/10_point.pdf（URL は 2011 年 1 月取得）
- 文部科学省 2005 「PISA 調査、TIMSS 調査の結果分析（中間まとめ）」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/001.pdf（URL は 2010 年 12 月取得）
- 文部科学省 2008a 『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 2008b 「平成 19 年度 全国学力・学習状況調査 【中学校】報告書」
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編』実教出版

- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 文部省 1999 『高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編』実教出版
- やまぐち総合教育支援センター 2010 「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する力を高める指導に関する研究 - 小学校における国語科・算数科を通して - 」
<http://www.ysn21.jp/tyousa/kyoudou149/shien.pdf> (URLは2010年12月取得)
- Benesse 教育研究開発センター 2003 「単元構想から評価までをITで実践し、指導と評価の一体化を推進」<http://benesse.jp/berd/center/open/syo/view21/2003/10/s031004.html> (URLは2010年12月取得)
- 市川伸一 2004 『学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策』小学館
- 市川伸一 2008 『「教えて考えさせる授業」を創る 基礎基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業設計』図書文化社
- 海保博之 2004 『学習力トレーニング』岩波書店
- 小島宏 2007 『新教育課程をめざした授業づくり』教育開発研究所
- 高階玲治 2005 『確かな学力向上のための指導 PDCA』教育開発研究所
- 根本博 2009 「PISA、TIMSS 国際調査結果から考える教育改革～『知』をみる眼を研ぎ澄ます～」<http://www.murc.jp/report/quarterly/200902/38.pdf> (URLは2010年12月取得)

『<高等学校>基礎・基本を定着させる授業づくりガイドブック』の作成関係者

<調査研究協力員>

所 属	職 名	氏 名
県立川崎高等学校	教 諭	佐々木 澄子
県立横須賀高等学校	教 諭	村田 克也
県立鶴嶺高等学校	教 諭	中村 英之
県立麻溝台高等学校	教 諭	中野 直人
県立橋本高等学校	総括教諭	山川 勝
県立寒川高等学校	総括教諭	揖斐 直次

<神奈川県立総合教育センター>

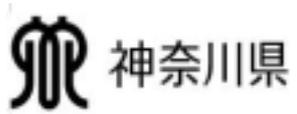
所 属	職 名	氏 名
カリキュラム支援課	指導主事	荒川 憲行
カリキュラム支援課	指導主事	山本 城
専門研修課	指導主事	永井 佳幸
カリキュラム支援課	教育指導専門員	結城 卓彦

<高等学校>基礎・基本を定着させる授業づくりガイドブック

発 行 平成 23 年 3 月
発行者 下山田 伸一郎
発行所 神奈川県立総合教育センター
〒251-0871 藤沢市善行 7 - 1 - 1
電話 (0466)81-1659 (カリキュラム支援課 直通)
ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

本冊子については、ホームページで閲覧できます。

再生紙を使用しています



神奈川県立総合教育センター

カリキュラムセンター（善行庁舎）
〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1

TEL (0466)81-0188

FAX (0466)84-2040

ホームページ <http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/>

教育相談センター（亀井野庁舎）
〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4

TEL (0466)81-8521

FAX (0466)83-4500

